

# 峰の上遺跡

窪川町南部地区県営圃場整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993・3

(財)高知県文化財団  
埋蔵文化財センター



# 峰 の 上 遺 跡

窪川町南部地区県営圃場整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

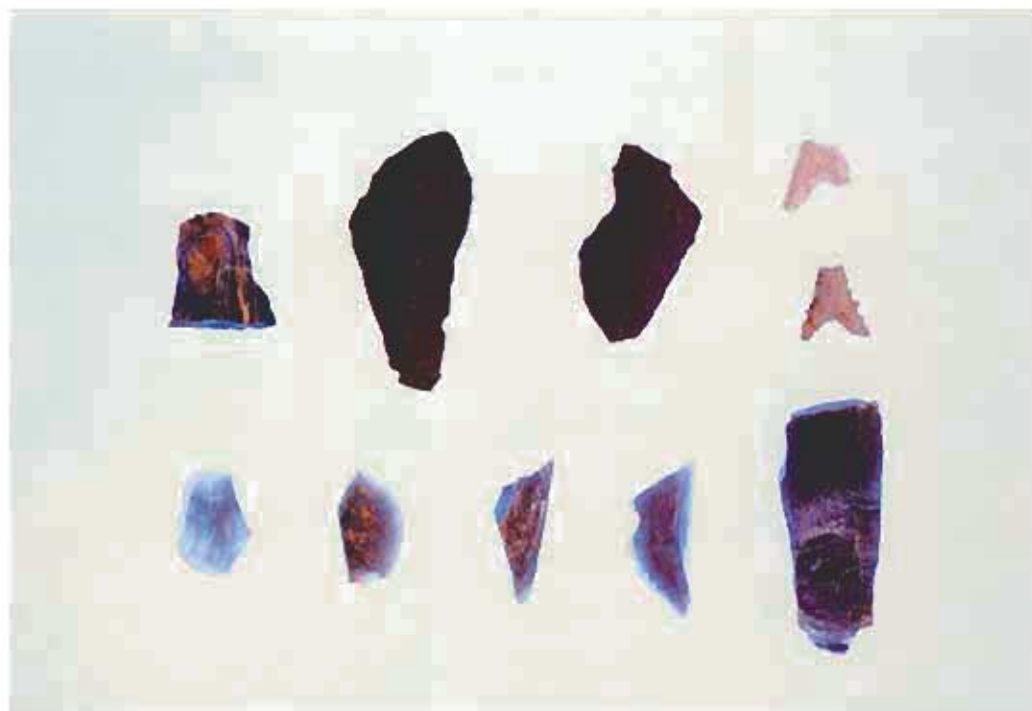
1 9 9 3 ・ 3

(財) 高知県文化財団  
埋蔵文化財センター





調査区遠景



縄文時代の遺物





中 世 の 遺 物



近 世 の 遺 物





# 序

窪川町は、清流四万十川に抱かれた山紫水明の自然豊かな土地柄で、幾千年にわたって人々の生活を育ててまいりました。人々の生活の歩みは営々とその土地に刻まれ、さらにこの度の峰の上遺跡発掘調査による少なからぬ発見は、それら先人達の生活の一端を伝える貴重な資料を得るものとして大変意義深いものです。

またこれらの資料は、現代に生きる私達が次の世代に伝えなくてはならない文化遺産であると共に、現代の私達の足元には先人の生活の営みへのたゆみない努力の蓄積があることを改めて認識させられるものであります。峰の上遺跡の発掘調査が窪川町の歴史をひもとく契機となり、一人でも多くの方々が埋蔵文化財に関心を持たれ、ひいてはより一層の文化振興の一助となれば幸いに存じます。

平成 5 年 3 月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

所 長 小 橋 一 民



## 発刊にあたって

本町には、四万十川の本支流の両岸を中心に縄文、弥生時代の土器、石斧、銅銚が数多く出土しており、自然と環境に恵まれたこの地は未知のロマンを秘め眠っているものと推察されます。

町内から発見または出土した遺跡、遺物は古代住民の生活様式を解明するための大切な財産であり後世に引き継がなくてはなりません。

今回の調査は、平成3年度窪川町南部地区県営圃場整備事業に伴う事前試掘調査に基づいて確認された、峰の上遺跡の遺存状況を確認するために行ったものでありますが、調査にあたりましては、高知県須崎耕地事務所をはじめ地元土地改良区の方々、発掘調査に直接担当していただきました高知県埋蔵文化財センターの近森泰子氏、また作業に従事していただきました関係者並びに本調査にご協力をいただいた地元住民の皆様に心からお礼を申し上げる次第であります。

平成5年3月

窪川町教育長

中 谷 猛



# 例 言

1. 本書は高知県高岡郡窪川町の県営圃場整備事業実施にあたり行われた、峰の上遺跡発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は平成4年6月22日から同年8月29日にかけて実施された。
3. 発掘調査は高知県教育委員会の指導を受け、窪川町教育委員会及び高知県の委託により、(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センターが実施した。
4. 発掘調査は同センター調査員 近森泰子が担当し、本書の執筆及び編集についても近森が担当した。
5. 記号については、Pはピットを、SKは土坑を、SDは溝を表す。
6. 発掘区には、4mのグリッドを設定しており、各地区をA～F区に分け、発掘区の東より西に向けて4m毎にa～と記号を付け、さらに南より北に向けて1～と番号をつけて発掘区を区画した。杭の番号は4mグリッドの南東コーナーを基準とし、つけている。

例.    A — a — 1  
         ↓    ↓    ↓  
         区   東西ライン 南北ライン

7. 本書で使用した地図は建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1の地形図を窪川町が複製したものを使用させて頂いた。
8. 遺物写真の縮尺は47、48が $\frac{1}{3}$ 、その他は $\frac{1}{2}$ である。
9. 発掘の事務については、窪川町教育委員会の戸田徳光、田井泰雄氏、センターの三浦康寛氏に大変お世話になった。
10. 発掘には、同町の玉川重富、和田ヤクエ、荒木律子、松田 馨、三浦庸喜（測量）、岡本澄江、芝 嘉伸、武政健一、武政美代子、井上 昴(重機)氏の皆様方、高校生中城隆君、埋蔵文化財センターの江戸秀輝、吉成承三氏の御協力を得た。記して心より感謝したい。
11. 整理及び編集作業には、山中美代子、山本裕美子さんをはじめ、大学生小原勝雄君、また、写真、遺物等については埋蔵文化センターの前田光雄、松田直則氏に御協力を頂いた。
12. 調査全般について、地元窪川南部土地改良区をはじめ、窪川町、高知県須崎耕地事務所、峰の上地区の皆様方には種々御協力、御援助を頂いた。末筆ながら関係者各位に、厚くお礼申し上げます。

# 報 告 書 要 約

1. 遺 跡 名 峰の上遺跡
2. 所 在 地 高知県高岡郡窪川町峰の上
3. 立 地 五在所の峰南西側山麓、舌状丘陵地上、標高約237 m
4. 種 類 縄文時代及び中世の掘立柱建物跡
5. 調 査 主 体 (財)高知県文化財団 埋蔵文化センター
6. 調 査 契 機 平成3年度高知県窪川南部地区圃場整備事業
7. 調 査 期 間 平成4年6月22～同年8月29日
8. 調 査 面 積 1,300m<sup>2</sup>
9. 検 出 遺 構 (縄文時代) SK 1 基  
(室町時代) SD 4 条 柱穴多数
10. 出 土 遺 物 (縄文時代) 石匙、石鏃、スクレイパー  
(室町時代) 青花、青磁、白磁、土師質土器、備前焼  
(江戸時代) 伊万里焼、唐津焼、その他近世陶磁器片多数
11. 内 容 要 約 峰の上遺跡は、窪川町と佐賀町との境の峠にあり、現在は段々畑の耕作地となっている。遺跡は過去に削平されており、遺構の残存状態は悪いが埋土中より中世の遺物を出土する掘立柱建物の柱穴群や溝が検出された。遺構は、数次にわたる立て替えと削平を受けており、掘立柱建物の規模や溝の性格などは不明である。  
また、遺構はほとんど残されていないが、縄文時代の石器を中心とする遺物が出土している。

# 本文目次

1. はじめに .....	1
2. 遺跡の歴史的環境.....	3
3. 調査の概要.....	5
(1) 調査の経過.....	5
(2) 調査の結果.....	5
4. 縄文時代 .....	8
(1) 出土遺物 .....	8
(2) A区SK-1の姫島産黒曜石について.....	9
5. 中    世.....	11
(1) 検出遺構 .....	11
(2) 出土遺物 .....	16
6. ま    と    め.....	18

# 表    目    次

表1 周辺遺跡一覧表
表2 峰の上遺跡遺物出土状況
表3 遺物観察表（縄文時代）
表4       〃      （中～近世）

## 挿 図 目 次

図 1	窪川町位置図	図11	峰の上古地図
図 2	峰の上遺跡位置図	図12	石器・剥離 1
図 3	周辺の遺跡図	図13	〃 2
図 4	トレンチ位置図	図14	白磁・青磁・青花
図 5	A区平面図・SK-1断面図	図15	土鍋・土釜
図 6	グリッド設定図	図16	備前焼・土師質土器・伊万里・唐津・ 近世陶磁器
図 7	遺構全体図	図17	伊万里・唐津・近世陶磁器
図 8	B区平面図	図18	〃 〃 〃 砥石
図 9	B区SD-1、2・D区SD-4平面図		
図10	E区平面図		

## 写 真 図 版 目 次

写真図版 1	遺跡の遠景など	写真図版 8	出土遺物 1
〃 2	調査区セクションなど	〃 9	〃 2
〃 3	A・B区遺構検出・遺物出土状態	〃 10	〃 3
〃 4	B区 〃	〃 11	〃 4
〃 5	B区完掘状況	〃 12	〃 5
〃 6	E区 〃	〃 13	〃 6
〃 7	F区 〃		



## 1. はじめに

窪川町は高知市より西方に約70km離れており、高知県西部の拠点中村市とのちょうど中間くらいに位置する。町の中央を南北に国道56号線が走り、町の中心地から大正方面へは国道381号線が延びており、窪川町は幡多や北幡への交通の要衝である。

窪川町は高知県の清流四万十川の中・上流域にあり、夏冬の温度差の大きい盆地を中心にひらけた町である。霧がよくたちこめる高南台地での夏の高温と豊富な水は、良質な米として知られる仁井田米を育み、四万十川では伝統的な火振り漁が行われている。

一方、同町東部の海岸は切り立った崖が多く見られるが、南部の興津海岸では夏には海水浴客で賑わう。町の中央には四国霊場第37番札所岩本寺があり、多くの人々の信仰を集めている。

峰の上遺跡は、国道56号線の中村方面に向かって行き、窪川の中心部を過ぎ隣の佐賀町との町境付近の五在所の峰(標高658m)の南西の裾野に位置する。国道の南側にある山地牧場では牛の飼育が行われるなど、峰の上遺跡周辺は田畑の広がるのどかな所である。平成3年度の県営圃場整備事業の事前試掘調査では、中世の遺物と掘立柱建物跡の存在が確認され、今回の発掘に至った。

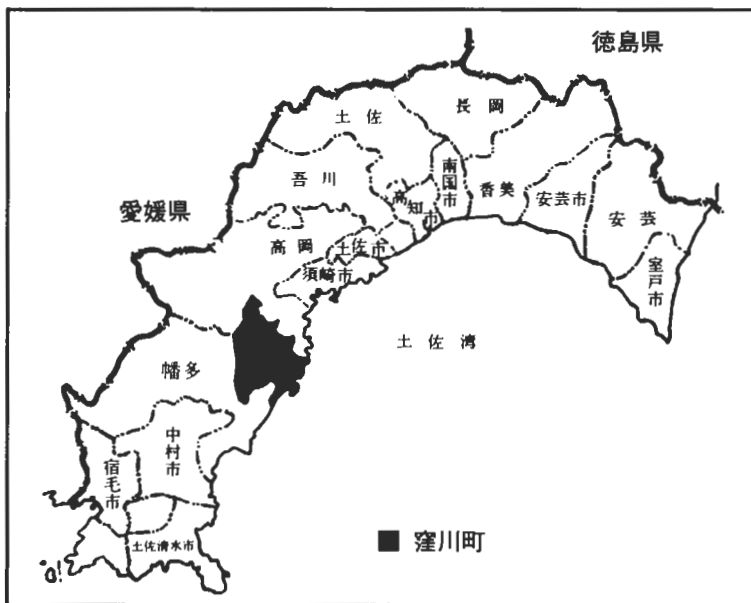


図1 窪川町位置図

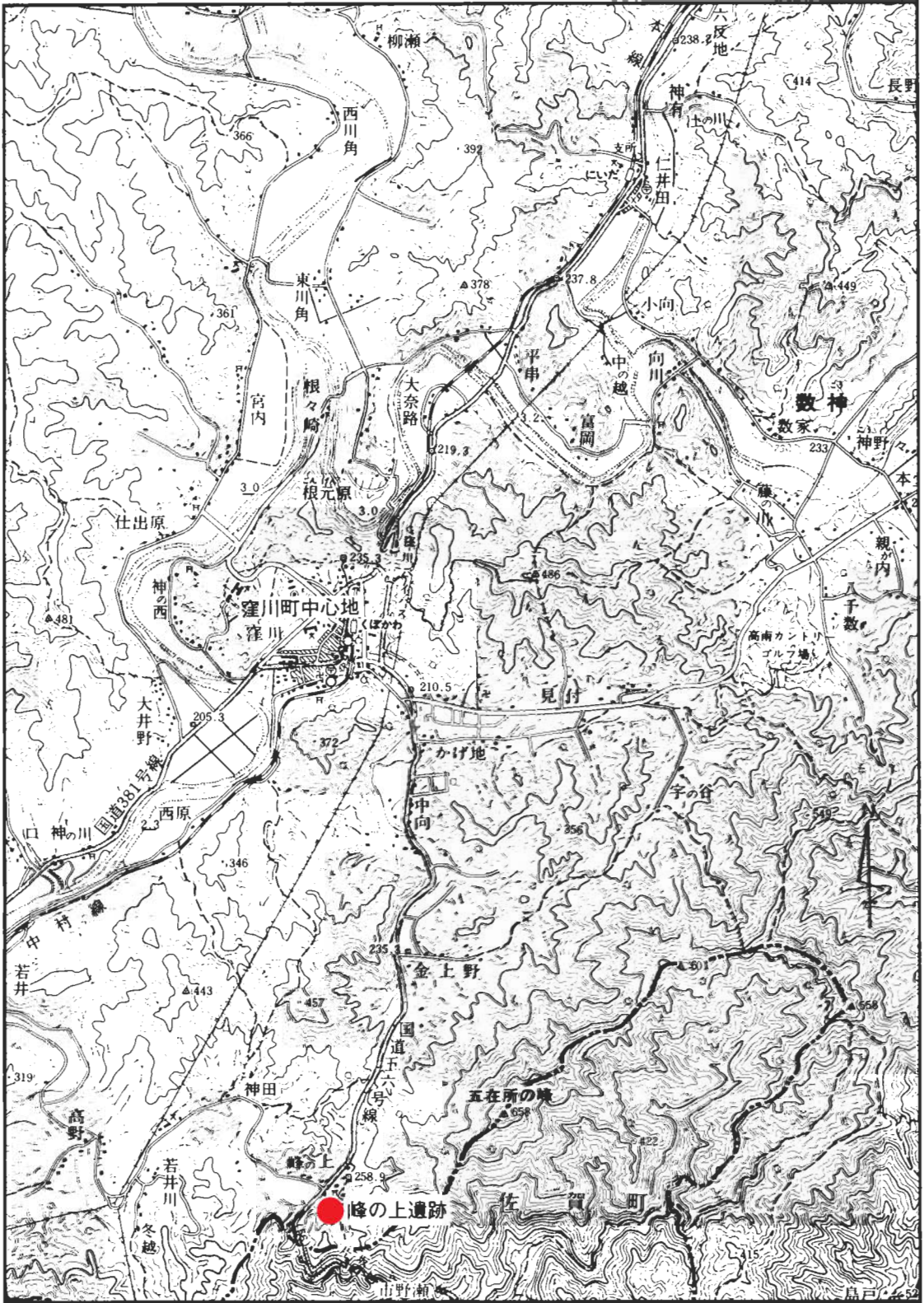


図2 鏡の上遺跡位置図 1:50,000

## 2. 遺跡の歴史的環境

霧のたちこめる周囲を山で囲まれた高南台地は、人々の生活にとって昔から環境の良い所であったらしく、四万十川の流に添って多くの遺跡が発見されている。図3-⑥、⑧の仕出原や根元原遺跡では縄文中期の注口土器が発見されたり、打製石斧や石槍も発見されている。弥生時代になると図3-⑦の弥生中期中葉の一時代を画する標式遺跡である神西遺跡があり、その他、作屋、西ノ川、宮内、西原などでも弥生土器や石包丁、凹石、敲石や磨製石斧などが発見されている。また、異彩を放っているのが、青銅器の出土例の多さである。根根崎で明暦三年(1657)に発見された広形Ⅰ式や中広形Ⅱ式の銅矛5本は現在図3-⑤の高岡神社の神宝となり、秋祭りの御神幸に「幸の広矛」として神輿を先導する。図3-③の西ノ川口遺跡でも銅鉾が5本一括で出土しており、図3-①の高加茂神社では銅鉾6本、他に銅戈1本が共に御神体となっている。この銅戈はもと3本一括で出土したらしく、上作屋の河内神社や県歴史民俗資料館などでも窪川出土の銅戈を保管している。銅戈は3本一括、銅鉾は5本一括で地中に埋納された例については、当時の弥生人の神への祈り、祭祀形態を彷彿させる。さらに時代が下れば、窪川城をはじめ中世山城が12ヶ所ほど確認でき、それらは当時この地方に勢力があった窪川氏を筆頭とする仁井田五人衆の本拠地であったと考えられる。

窪川町は現在、遺跡の分布調査が完了しておらず、今後の調査でさらに多くの遺跡が発見される可能性を秘めた地域である。

表1 周辺遺跡一覧表

1	高加茂神社	銅鉾6 銅戈1	12	志和分城	中世山城
2	ホコノコシ遺跡	銅鉾1	13	青木番城	中世山城
3	西ノ川口遺跡	銅鉾5	14	東川角城	中世山城
4	宮内遺跡	弥生時代	15	茶臼山城	中世山城
5	高岡神社	銅鉾5	16	山の上新城	中世山城
6	仕出原遺跡	縄文時代	17	新在家城	中世山城
7	神西遺跡	弥生時代	18	中越城	中世山城
8	根元原遺跡	縄文～古墳	19	天一城	中世山城
9	峰の上遺跡	縄文～中世	20	窪川城	中世山城
10	影山城	中世山城	21	古溪山城	中世山城
11	本在家城	中世山城			



図3 周辺の遺跡図 1:50,000

### 3. 調査の概要

#### (1) 調査の経過

峰の上の発掘調査地点は、東の五在所の峰より南西になだらかに下ってきた裾野にあり、その丘陵部を夫講（村の共同体で力を出し合って耕地整理をしていく）により、何段もの段々畑を開墾している。国道56号線に平行した4段の畑を東からA、B、C、Dの調査区とし、トレンチを設定した。まず4段の畑を東から西まで、標高の高い東から低い西に下って一直線に8m×68mの長方形のトレンチを入れた。さらに前年の試掘時に柱穴を検出していた2段目B区の北に、12m×24mの部分を拡張し、さらに2段目の北西に張り出した部分に試掘トレンチを掘り、柱穴を確認したので、ここをE区としB区までトレンチを拡張した。3段目のC区は試掘時の柱穴の他はあまり遺構がなく、耕地整理による削平を相当受けていた。

4段目D区西半分は何度も整地や嵩上げをして水田や畑を作っている状態が断面で判明する。しかし東西を整地で切られているが、溝が一条検出できたため、他の遺構を捜してトレンチを北へ拡張した。北で柱穴を確認したのでここをF区とし広げると、西半分で地形が落ち込んでおり、そこに旧耕作土が二次堆積し包含層となっていた。その上に柱穴群が掘られている。また、生活に欠かせないのが水場であるが、峰の上遺跡調査区の東の山麓に水質の良い泉が今も湧いており、その他1カ所と合わせて、2カ所の水場が、昔からあったようである。杭の基準は南北ラインを磁北に合わせてあり、真北との差は東へ4度53分53.43秒である。調査は4mのグリットを設定し重機にて耕作土を除去した後、遺構を検出し進められた。

#### (2) 調査の結果

中世以来、何度も土地を整理しておりかなり削平を受けており、大半の調査区では第Ⅰ層 耕作土、第Ⅱ層 床土で整地をしていない場合は、その下第Ⅲ層が遺構検出面となる。全体的に柱穴や溝の深さは20～30cmと浅く、中世の生活面もすでに削平されており、包含層も失われており、耕作土中に縄文～中世、近世の遺物が混在していた。遺構はまずA区で検出できた。しかし北・東は整地で切られ、南には水田があったようである。南西部は畑と水田の層が重なっており、その北にはかつての水田の下層であったのか、薄い炭層が検出されている。検出した遺構からの遺物は少なく、

図5 P-1からは底部に回転糸切り痕のついた土師質土器片1点が出土した。

図5 SK-1からは、後で詳述するが姫島産黒曜石片が3点出土している。柱穴そのものは新しいと考えられるが、時代の確定は難しい。

B区は南北に32mと広いが、中央部で試掘時に16世紀の細蓮弁文のついた青磁が、柱穴の埋土中より出土しているので、中世の遺構を捜して広範囲を調査した。B区南側B-f-2からB-i-2にかけて溝2条(SD-1、SD-2)(図9参照)が検出された。両者共に深さ20~30cmぐらいで、B-C区の断面で見ると、灰褐色の埋土の溝2条があるように見えるが、実際にはSD-2は途中で浅くなり消滅する。SD-1は西に向かって深くなり、かつまた広がってゆく。SD-1では、備前焼播鉢1点、土師質土器坏1点埋土中位で出土し、SD-2では、東の床面直上で青花1点が、また西では、埋土上面で白磁碗底部1点が出土している。SD-1西の南側図9 P-8では土鍋1点が柱穴の埋土より出土した。ここでは中世の遺物が遺構より出土するが、溝の年代を決定するのは難しい。溝より南のB-g-1からB-h-1の柱穴群は少量の炭化物以外検出できず、近世の掘立柱建物跡のように考えられる。

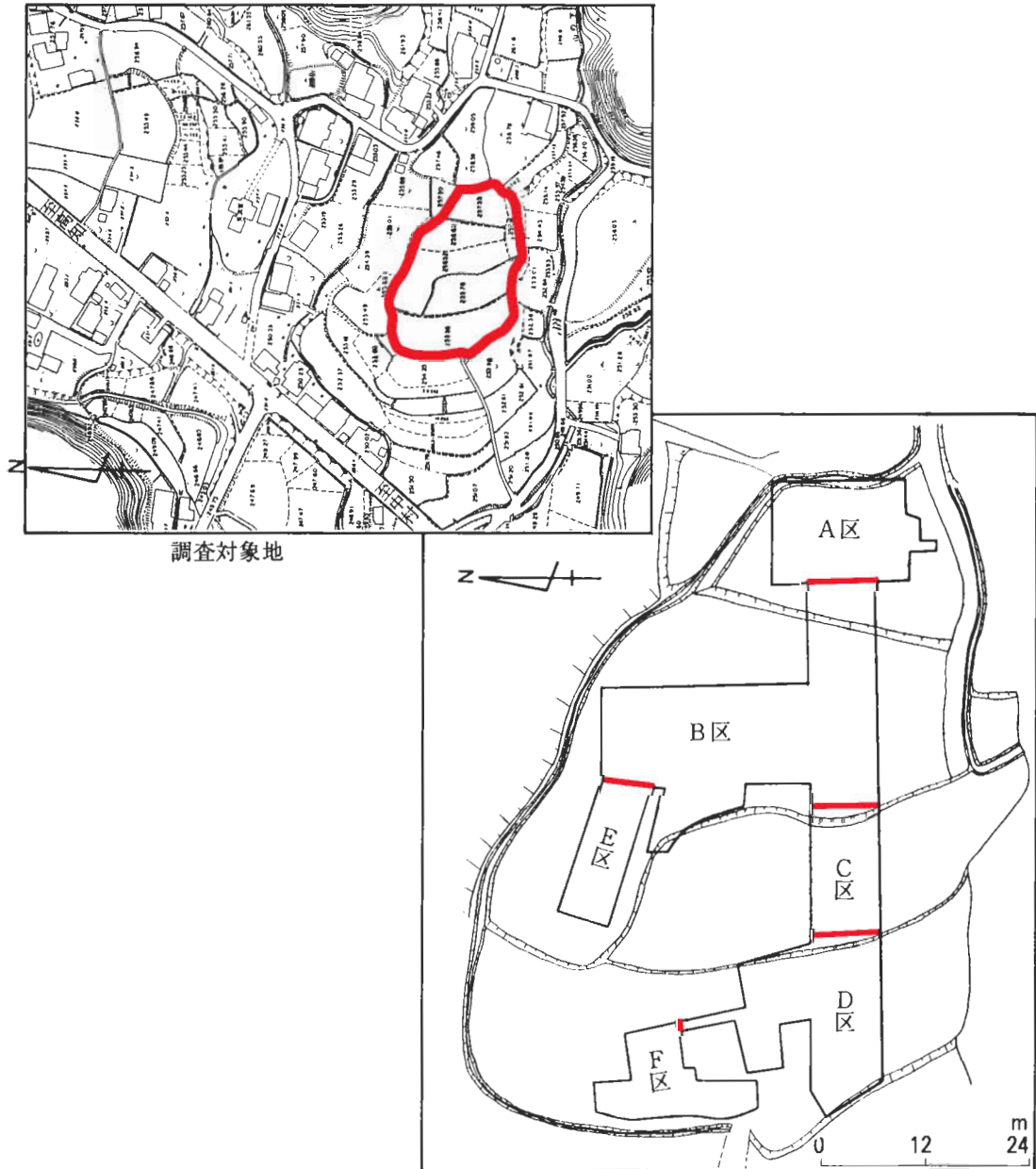
B区中央部は柱穴群が検出された。図8のP-1からP-7には、青磁碗片、青花碗底部、土師質土器片、土鍋など、中世の遺物が柱穴の埋土中より出土した。E区は元々B区より張り出していた部分だが、もとはB区がもっと広い平場であった時の一部であり、C区のある三段目を作るために削平しており、E区のみ残したものと考えられる。ゆえにE区で検出されている図10の溝一条(SD-3)と柱穴群も、P-1、2の土師質土器片の出土しか認められないが、B区と同様中世の遺構であると思われる。

C区は試掘時に2間×1間の柱穴群が検出されているが、埋土の状態からおそらく近世以降の掘立柱建物跡であろう。また、ピットが少数検出されているが柱穴ではなさそうである。B区から削られる時にかかなり下層まで掘られたようであり遺構はない。

D区は東にC区より続く整地の名残があり、試掘時にはその上に新しい時代の掘立柱建物の柱穴が検出された。また西半分はかなり深く旧水田跡が残っていた。この水田跡と東の整地で切られているが、図9の溝1条(SD-4)が検出された。埋土は茶褐色粘質土であり、備前焼摺鉢1点、土師質土器鍋2点など中世の遺物を含む。このSD-4には北側より人頭大の石を多く投げ込んでおり、SD-4の後の時代の整地の際、溝のなかに石を投げこんだのではないだろうか。埋土より見てSD-1、2

よりは古い時代のものではないかと思われる。

S D-4 が検出されたことによりさらにD区を北へ拡張していった。D区の北で柱穴群を確認したので、ここをF区とした。F区西半分は地形が落ち込んでおり、旧耕作土が二次的に堆積していた。これが包含層であり、縄文時代の石鏃や石器片、姫島産黒曜石片、中世の土鍋、土師質土器などが混在して出土した。この包含層の上から柱穴が掘られていたが新しい時代のものである。



## 4. 縄文時代

### (1) 出土遺物

#### A：縄文土器

図化できない小片だが、全部で8点出土した。色調は暗褐色で、胎土には砂粒が多く含まれ、焼成は軟質である。1点のみかすかに稜を持つ浅鉢タイプのものがある。出土したのはA区とB区であり、ほぼⅠ層 耕作土、Ⅱ層 床土中に混在していた。

#### B：石器類

B区より石匙1点、石鏃1点、D区よりスクレイパー1点、F区より石鏃1点、剥片1点が出土した。

##### 図12-1

B区南部のⅠ層 耕作土中より出土した赤茶色のチャート製石匙である。手持つための握みを持ち、縦形の刃を持つ。右側縁に細かな調整を行い刃部を作り出している。縄文時代の典型的な打製石器である。縄文時代前期の可能性がある。

##### 図12-2・3

2はB区Ⅱ層 床土中より、3はF区3層 旧耕作土(包含層)中より出土した。どちらも風化した乳白色の珪質頁岩製の打製石鏃である。三角形の底辺をくぼませた逆V字型で、挟りは深く脚を長く仕上げている。3は左右の刃部が非常に鋭く尖って精緻に作られている。

##### 図12-4

F区のⅢ層 旧耕作土(包含層)中より出土。石材はチャートで黒色のなかに白い縞が入る。両側縁部に使用痕と思われる細かな剥離痕がありスクレイパーと考えられる。下端部は折損する。

##### 図13-10

珪質頁岩製のスクレイパーで、片方の側縁全体に細かい剥離をつけ、刃部を作り出している。反対側の側縁には、部分的に細かい剥離がある。削器として使用されたものであろう。

#### C：サヌカイト剥片

A区南西Ⅲ層 旧耕作土中より風化した白灰色の約2cmくらいの剥片が1点出土



した。サヌカイトの産地である香川県からもたらされたものと考えられ、おそらく縄文時代に石器の材料として高知に運ばれたものであろう。

#### D：チャート剥片

製品ではないが、石器の材料となるチャートが数点出土している。色は暗赤色、緑色などさまざまである。階段状剥離や槌状剥離を持つものもあり、石器製作が行われていたと思われる。図8のB区SK-2より緑色のチャート剥片が2点出土している。

#### E：姫島産黒曜石

##### 図13-5

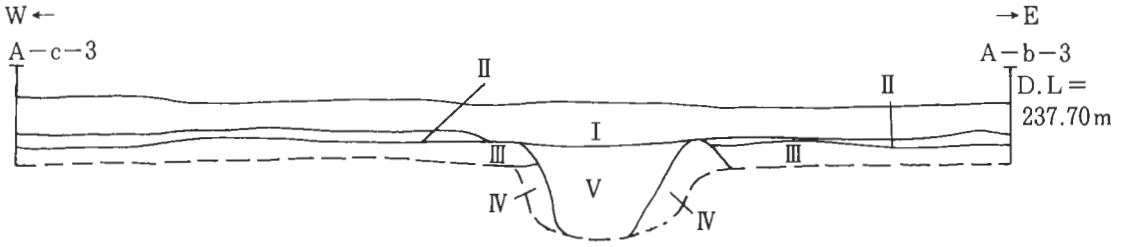
盤状の剥片であり石核の一部とも考えられる。図中の矢印aは風化面を残す。矢印bの面は打撃を加えられて大きく剥離しており、矢印cの面もまず大きく打撃を加えて剥離させた後で、打点を持つ矢印dのように小さく剥離させ石器を作るのに利用したのである。縄文時代前期の可能性がある。

図13-6・7 図12-8・9 その小さな剥片である。

## (2) A区SK-1出土の姫島産黒曜石について

縄文時代（約12,000年前～紀元前300～400年前）の一時代を画するものに、今から6,300年ぐらい前の縄文時代前期、九州南部の鬼界ヶ島の海底火山の噴火により、多量の火山灰が西日本一帯に降り、それが堆積した火山灰層（アカホヤ、音地などと呼ばれている）が存在し、これを基準にして考えてみたい。峰の上の地層を調べてみると、A区より10mほど山側にサブトレンチを掘ってみたが、すでにアカホヤ（火山灰層）は他の土に入り混じり攪乱されていた。B区の南側断面を見ても同じ状態で、すでに縄文時代の地層は整地によりなくなってしまっていた。A区も遺構検出面で整地されたところが多いが、A区北中央の溝状の土坑SK-1（南北長約3m、東西幅約80cm、深さ約20cm～35cm）の中には、かろうじて攪乱されていないアカホヤが残っており、そのアカホヤを取り除いている最中に、姫島産黒曜石の小さな剥片が土坑の西壁に張り付く様に3点検出された。もし、土坑内で検出されたアカホヤが、二次堆積でなく、自然堆積の状態であれば、この黒曜石により、峰の上遺跡が営まれていた時代が6,300年以前にさかのぼる可能性が強い。

A区 SK-1 東西断面図



- I 耕作土
- II 床土、黄茶色粘質土
- III 茶褐色混小礫粘質土
- IV 褐灰色粘質土
- V アカホヤ

A区 平面図

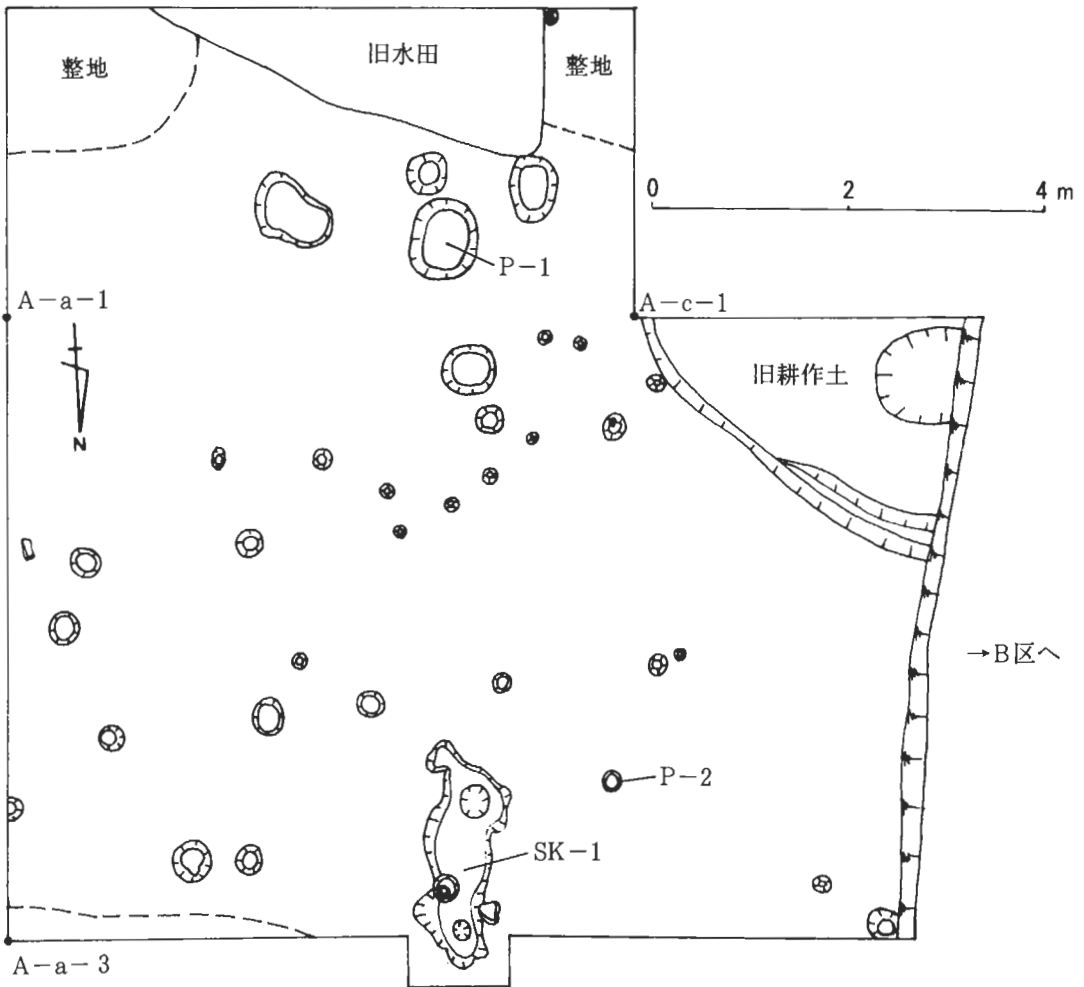


図5 A区、平面図・SK-1断面図



図6 フリット敷設図  
 図7 遺構全体図



## 5. 中 世

### (1) 検出遺構

#### A：ピ ッ ト

平成3年度圃場整備事業の試掘調査では、今回のB・C・D区より掘立柱建物跡が検出された。特にB区の柱穴からは、16世紀の細蓮弁文青磁2片が検出され、中世の遺構であることが判明した。今回の発掘でも、中世の遺構検出に努めたが、時代を判定できるものは少なかった。

A区では中央部でかろうじて整地を免れた柱穴が残っていたが、出土する遺物は少なく図5のA-b-2のP-2より出土した土師質土器片程度である、建物跡としてはまとまらない。図5のA-b-1の南のグリッドのP-1からは、回転糸切りの土師質土器底部が出土しているが、埋土の状態から見れば柱穴ではない。

C区では、試掘時の埋土が灰褐色で、新しい時代と思われる柱穴のみであったが、2間×1間の掘立柱建物跡が検出された。

D区では後述するSD-4以外は中世の遺構とは考えられない。

F区の東半分はピット群が残っているが、西半分は地形が落ち込み、旧耕作土(包含層)が二次堆積している。その縄文～中近世の遺物を含む包含層の上からもピットが掘られているが、遺構からの遺物の出土は認められなかった。

B区では図8、9のP-1～8、図9のSD-1、2のように中世の遺物を含む遺構が検出された。しかし、過去の整地により、中世の生活面や包含層は削平されており、深さ20～30cm、径10～30cmの柱穴の底部のみが残るだけである。ただ穴を掘ったものも多いが、底に根石を敷いたり、少々大きめの石を置いたりしているものもある。削平が多くどのような規模の建物だったのかは分からないが、礎石建てではないので、板ぶきや藁ぶき屋根の建物等の存在が推察される。図8のP-1、2、5は青磁を、P-7は白磁を、P-3、4は土師質土器片を、図9のP-8は土鍋を出土している。E区では図10のSD-3の西側P-1、2より土師質土器片が出土している。ピットの並びより見て、柵列状に見えるものや、または1間×2間程の規模の掘立柱建物跡と考え得るものもあるが、数次の立て替え及び削平により、確実に規模、並びを復元できるものはなかった。

## B：溝状遺構

B区南側より東西に2条(SD-1、2)、E区西側より南北に1条(SD-3)、D区より東西に1条(SD-4)が検出されている。SD-1、2の埋土は灰褐色粘質土、SD-3、4は茶褐色粘質土である。

図9のSD-1は長さ約11m、幅約40~50cmであり、西にいくに従って広がってくる。B-C区断面では、幅2.70mとなり、SD-2との関係をみれば続くものかもしれない。SD-1のNo.1より土師質土器坏の口縁部が1点、No.2より備前摺鉢1点が出土している。SD-2は長さ約11mであり、SD-1と同様に幅40~50cmであるが、図9のNo.3より青花1点、No.4より白磁1点が出土している。図10SD-3は長さ約5m、幅40~60cmで、炭化物ぐらいしか出土していないが、周りの柱穴の底部よりは、浅い位置であった。しかし、柱穴と同時代のものを見てよいであろう。SD-4は長さ約5m以上、幅0.7~1.4mで、図9のNo.5より備前摺鉢が、No.6、7より土師質土器片(ススが付着しているので鍋であろう。)2点が出土した。SD-1~4共に言えることは、検出面より上の耕作土や床土中には、近世の遺物が多く入っているが、溝の埋土中よりは中世の遺物しか認められないと言う点である。水田の用排水路または家の周囲に巡らせていた溝なのかは断定はできないが埋土より見て、機能した時代は4条とも中世と考えて良いであろう。

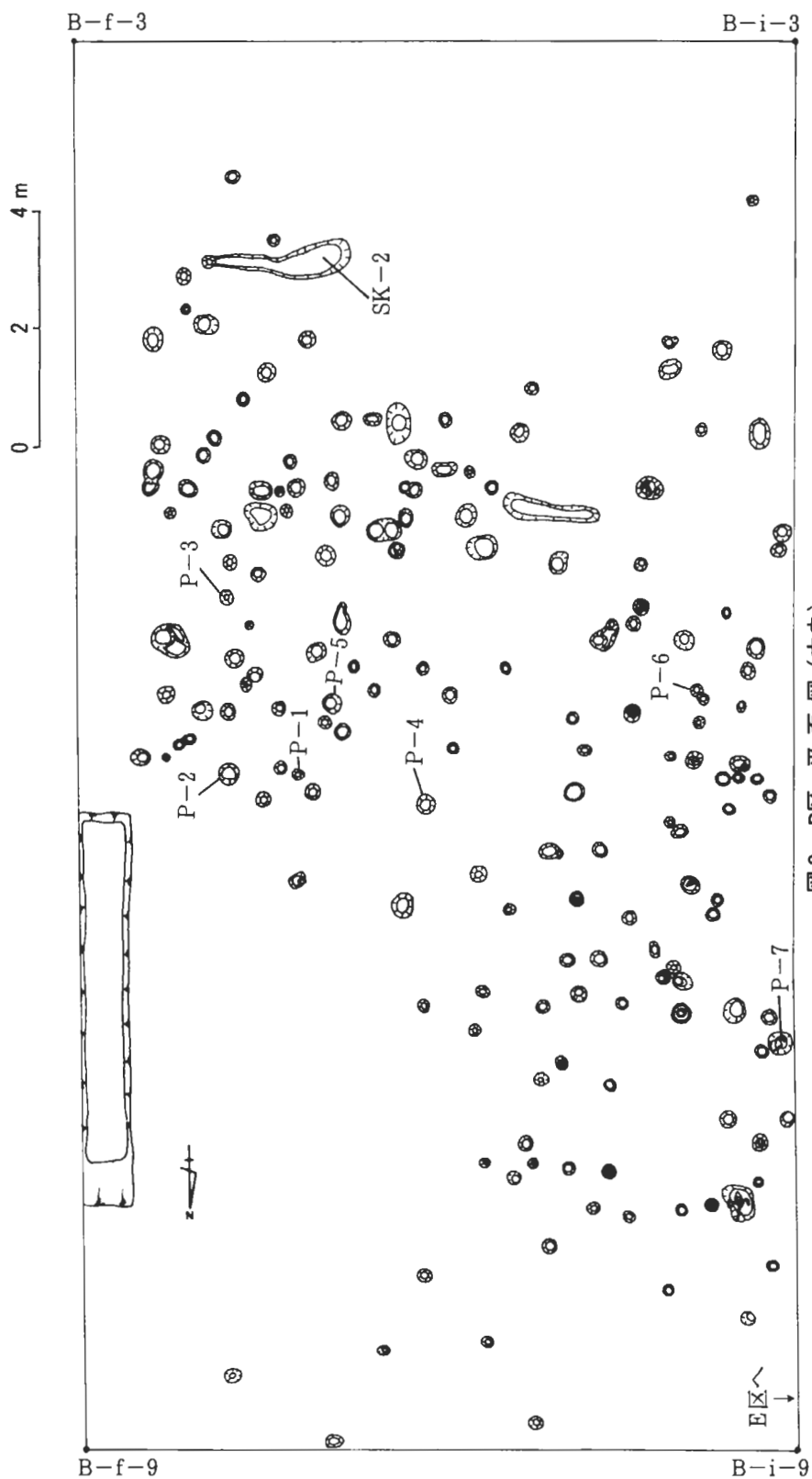
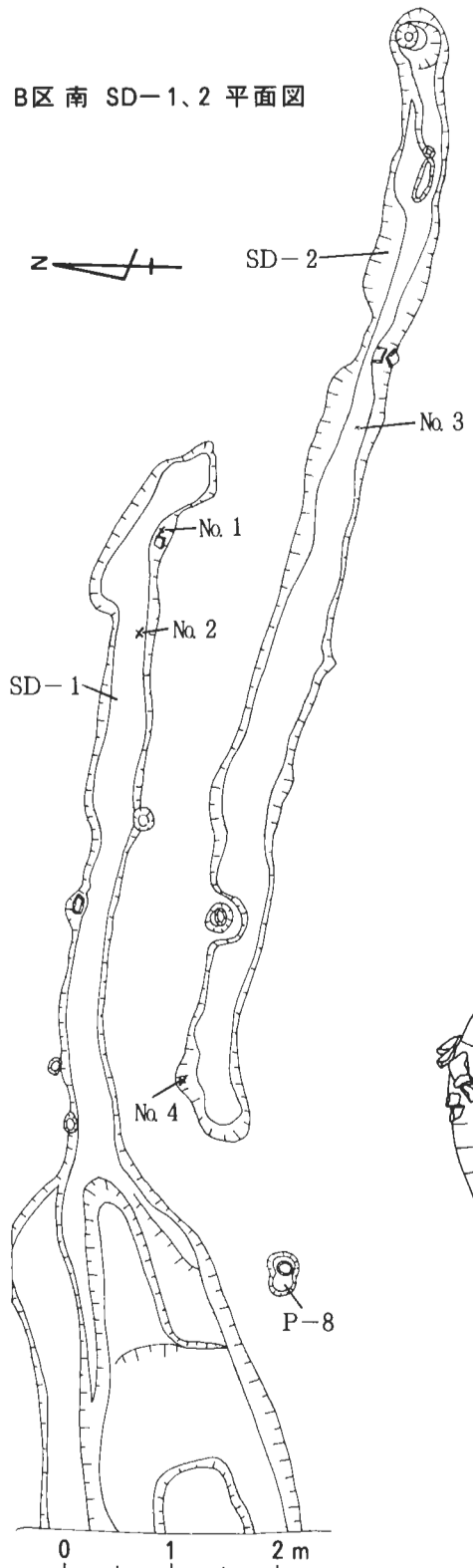


图8 B区平面图(中央)

B区南 SD-1、2 平面图



D区 SD-4 平面图

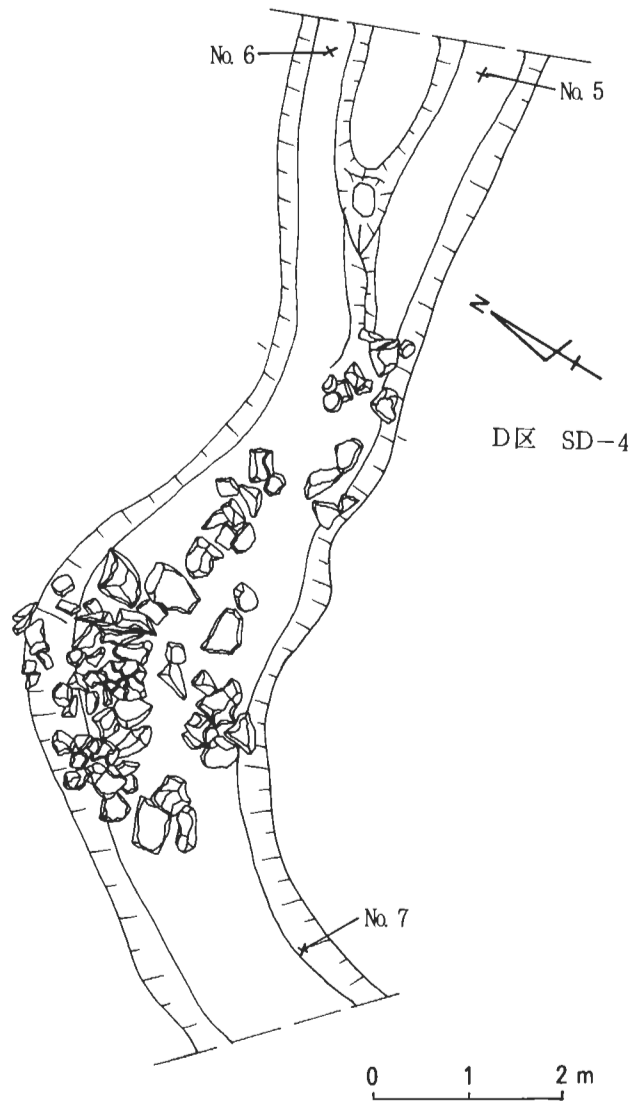


图9 B区 SD-1、2 · D区 SD-4 平面图



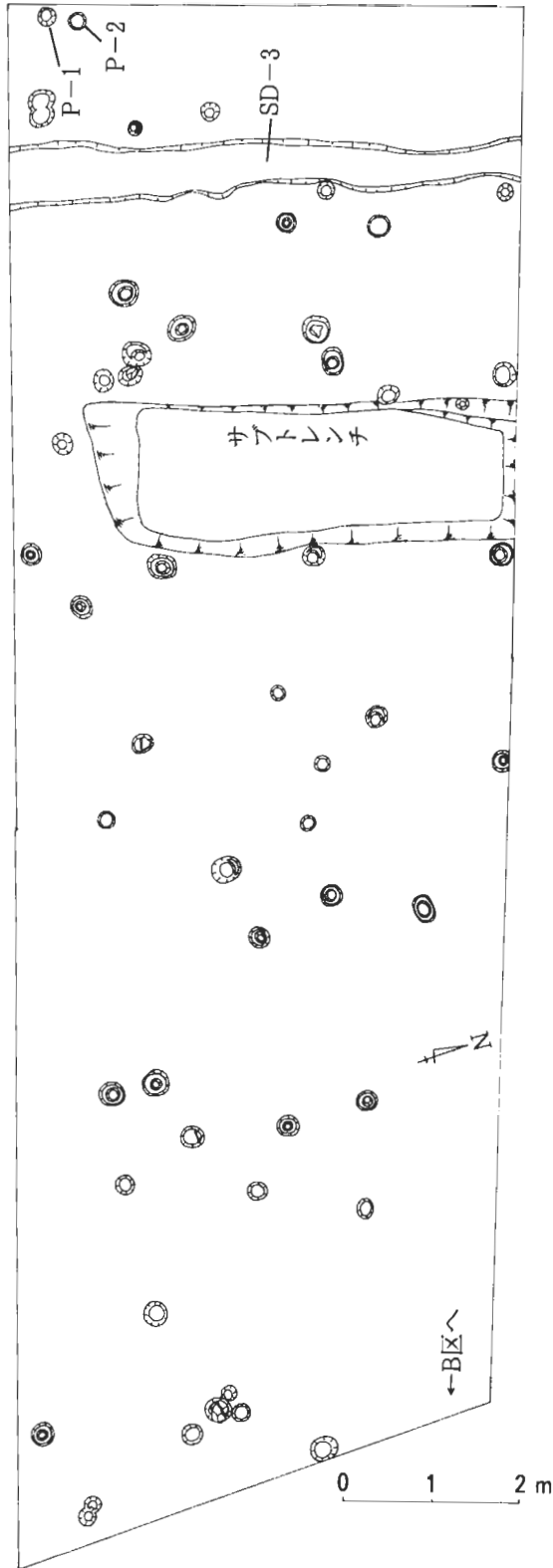


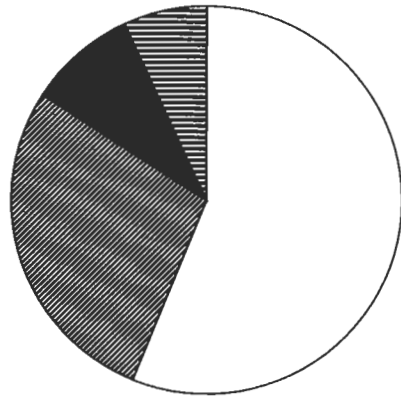
図10 E区平面図

## (2) 出土遺物

峰の上遺跡の出土遺物総数は約430点であるが、ほとんど破片ばかりである。その内約56%が近世陶磁器で、特に磁器の製品が多い。中世のものとしては、中国よりの輸入陶磁器類が全体の約9%であり、その他、備前焼、土鍋、土師質土器を併せて約28%位である。峰の上遺跡全体で中世の遺物は約37%を占める。その他、縄文時代の土器、石器類が全体の7%になる。

表2 峰の上遺跡遺物出土状況

項目名	%
□ 近世陶磁器	56.0
▨ 備前、土鍋、土師質土器	28.0
■ 輸入陶磁器	9.0
▤ 縄文時代の石器、土器	7.0
合計値	100



### A：中国よりの輸入陶磁器類

峰の上遺跡の遺物の約9%が、こういった輸入品である。海上、河川交通による船での物資輸送が盛んとなる、15世紀後半～16世紀前半の室町時代後半には、平野部から離れた奥地でも輸入陶磁器が出土しており、流通していたようである。その中で一番多いのは、龍泉窯系の青磁でB～F区より33点出土した。細蓮弁文のついた碗6点、稜花皿3点、毛彫り文様を持つものが3点ある。遺構出土のものは図8のB-f-6のP-1、2の柱穴より2点、B-h-5のP-6の柱穴より1点である。

次に白磁が5点出土している。D、F区でI層 耕作土中より3点、これらは16世紀のものと考えられるが、図9のB-h-2のSD-2西の埋土上面にあった、輪高台の白磁皿底部は15世紀後半のものである。また、D区Ⅲ層 旧耕作土中より1点出土している。

次いで青花が6点出土しており、D区の1点以外はB区出土である。図8のB-h-7、P-7の埋土中位出土の青花は、ピット上位に置かれた大きな石の下より出土した。礎石がわりの石だったのか、あるいは地鎮のためだったのか、または柱穴の廃絶儀礼であったのかは定かではない。また、B-g-2、SD-2東側の床

面直上よりも、青花が1点出土している。

#### B：備 前

9点出土しているが内4点が摺鉢である。焼きのあまい土師質的なものから炆器質的なものまで様々であり、色も備前らしい暗茶色から赤茶色までいろいろである。備前焼が土佐に多く持ち込まれるようになるのは、備前IV期ぐらいからであるが、本遺跡で出土したものはIV期中心のもので、室町時代後半のものである。

#### C：土師質土器

削平を受けるときに破壊されてしまうのか、土師質土器はあまり形の残っているものは少ないようである。最も形態を残すものが、F区Ⅲ層(包含層)中より出土した土鍋、土釜の類である。土師質のものが24点出土している。また、瓦質の釜の罅部の破損しているものも1点出土している。遺構からは図9のB-i-2、P-8で1点、図8のB-f-5、P-3で1点発見されている。松田直則氏編年の釜E型、釜D型の形式が主である。他は図5 A-b-1のさらに南のグリッド中P-1より、器種は不明だが底部回転糸切りのものが1点出土している。さらに、B-g-2、SD-1東より土師質土器坏口縁が1点出土し、また、図8 B-h-5のP-2、B-g-6のP-4より、少量の土師質土器片が、さらに図10 E-m-9のP-1、P-2でも出土している。SD-4でも東側と西側で2点出土しているが、表面にススが付着しており鍋のようである。

#### D：鉄 製 品

時代の判定はできにくいだが、鉄製品も少量出土している。丸頭の釘や角頭の楔、スラグ類が8点出土している。

#### E：近世陶磁器

近世のものは、陶器片71点、磁器片172点出土している。I層 耕作土、II層 床土中に多いが図化できるものは少ない。京焼風の碗や伊万里、唐津などがあり、肥前系のものが多い。紅猪口なども6点出土している。

#### F：そ の 他

F区西Ⅲ層(包含層)中より赤茶色の砂岩製の砥石、軽石を各一点ずつ出土している。D区1層 耕作土下よりは、火縄銃の玉が一点出土し、また石製品の割れたものだが、表面を金属のようなもので磨き平らにした上で、何かを研磨したような細長い筋状の溝をもつものが1点出土している。

## 6. ま と め

窪川町には現在の国道56号線、昔の中村街道があり、さらに北へ抜ける大正街道もある。峰の上遺跡の前には南北に昔の中村街道、西には若井川を通り四万十川へ抜ける道、南東には遍路道、さらにその近くには昔の番所跡があったらしい。他より標高の高い峠であると共に交通の要衝であるといえる。

峰の上については、天正17年(1589)『長宗我部地検張』の仁井田之郷に「峯之上之村」とあり、地積七町九反三十代三分才、ヤシキ九筆で窪川分とある。『南路志』第三卷郡郷の部(下)では、「峯之上村窪川郷十三村之一也。」総地積は八十石五斗五桮三合とある。『元禄地弘張』では峰ノ上村、総地高約九十八石となっている。『元禄郷張』(1700)では約八十石、さらに『寛保郷張』(1742)では、10戸、41人、馬4頭の記載がある。小村であるといえども、連綿と続いて来たのである。

峰の上遺跡の調査区について、古地図と現在の地図とを比較してみると、だいたい発掘区のあたりは「ムカイヤシキ」と呼ばれており、現在も小字として残る。『長宗我部地検帳』にもこの名が記載されている。今回の発掘で検出された掘立柱建物が、小字に表されている「ムカイヤシキ」跡である確証はないが、文献に現れる以前の中世の遺構が検出でき、中世より近世にかけて「ヤシキ」が建てられていた事がわかる。『南路志』には「観音向ヤシキ」とあり、さらに北には天満宮があり、かつては「カミヤシキ」という小字であったようだ。同じく『南路志』には「古城」とあり、峰の上に伝承地があるが分布調査では発見されていない。しかし、城の立地としては峠という条件を考えて、今後の発見に期待することができるのではないだろうか。出土した遺物より見て時代は縄文時代より、15世紀後半～16世紀代の中世さらには近世、現代に至るまで人びとが住んでいたようである。

## 参 考 文 献

「窪川町史」昭和45年窪川町史編集委員会

「長宗我部地検帳」高岡郡下の二、「南路志」第三卷郡郷の部(下) 高知県立図書館発行

「高知県の地名」日本歴史地名大系40、平凡社

第3回四国中近世土器研究会 直田直則氏発表資料「土佐の古代末から中世の煮沸具について」



図11 峰の上 古地図



表3 遺物観察表（縄文時代）

挿図番号	出土地点 (層位)	法 量 (cm、g)			器 種	石 質 ・ 形 状 ・ そ の 他
		最大長 (cm)	幅 (cm)	重量 (g)		
1	B区I層下	4.3	2.1	6.9	石 匙	縦長タイプの石匙で裏面には調整痕はあまりなく、手に持つ部分である摘みを作る際の剥離が両側縁にある。また裏面の先端には使用痕と考えられる小剥離がある。表は中央部の厚みのあるところから右刃部にかけて細かい剥離が多い。完形の赤茶色のチャート製である。
2	B区I層下	(1.6)	1.1	0.5	石 鏃	珪質頁岩製で三角形で基部の抉りは深く、脚は長いタイプである。両面とも刃部の細かい剥離がみられ直線的である。先端と右脚部に欠損がある。
3	F区III層	(1.7)	1.5	0.6	石 鏃	上と同形式の珪質頁岩製石鏃である。刃部は直線的で剥離が鋭く丁寧につくってある。抉りは深い。先端部欠如。
4	F区III層	(2.7)	(2.5)	6.8	剥 片	チャート製であるが両側縁に使用痕と思われる細かな剥離痕が認められる。半分に折損している。スクレイパーの可能性はある。
5	D区I層	5.0	2.0	19.2	姫島産黒曜石	自然面を残す石核の一部であろうか。大きな剥離面を残し、大小の剥片を取ったものと思われる。

挿図番号	出土地点 (層位)	法 量 (cm、g)			器 種	石 質 ・ 形 状 ・ そ の 他
		最大長 (cm)	幅 (cm)	重量 (g)		
6	A 区 II 層 薄い炭層中	2.3	1.7	1.5	剥 片	姫島産黒曜石剥片
7	B 区 中央 I 層	3.4	1.5	2.8	同 上	同 上
8	F 区 III 層	2.7	1.5	2.2	同 上	同 上
9	F 区 III 層	3.3	1.2	2.9	同 上	同 上
10	D 区 I 層	5.9	2.5	16.2	スクレイパー	珩質頁岩製で、右側縁全体に細かな剥離を加え、刃部を作り出そうとしている。左側縁には細かな剥離が認められる。



表4 遺物観察表（中～近世）

※ 産地不明のものは、近世陶磁器と表現している。

挿図番号	出土地点 (層位)	器種	法 量 (cm)				形 態・文 様	手 法・その他
			口径	残存 器高	胴径	底径		
11	B-h-2 SD-2 埋土上面	白磁 皿		1.1		3.95	低い輪高台。内面全体、外面高台際まで施釉。	回転ヘラ切りで高台部を切る。15世紀後半
12	F区Ⅲ層	白磁 皿	12.6	1.9			口縁部をなだらかに外反し端部を丸くおさめる。	16世紀
13	B区Ⅰ層	白磁 皿		1.8		7.0	低い輪高台。壘付けのみ露台でその周囲は砂粒が少量付着している。	
14	D区Ⅰ層	白磁 皿		0.8		7.0	同 上	16世紀
15	D区Ⅲ層	白磁 皿	9.0	(1.5)			丸みをもった胴上部から外側へ口縁部が反る。端部は丸く加工。内外面とも淡黄色の釉が塗られている。	ロクロ跡明瞭
16	C区Ⅰ層	青磁 碗		2.3		4.2	丸ノミ状工具による細蓮弁文の文様をもつ。内外面及び輪高台内側半分まで施釉。釉色は萌黄色である。高台部外面は丸みを帯びているが高台内側はヘラで削った様に垂直に近くなっている。	15世紀中ごろ
17	F区Ⅲ層	青磁 碗					輪高台だが破損している。暗青緑色の釉が高台裏を除いて内外面全部に施釉されている。見込に印花文を描く。	16世紀
18	F区Ⅲ層	青磁 碗	13.9	1.7			胴よりなだらかに口縁に至り、端部を丸くおさめる。外面に細蓮弁文を描く。蓮弁の先はみだれた山形となる。	16世紀
19	F区Ⅲ層	青磁 稜花皿	15.8	1.0			胴上部よりなだらかに外面に反り、端部は丸くする。口縁部内面は少し膨らんでおり内外面に施釉。口縁端部、約5mmおきに切れ目を入れている。口縁内面下に二条の界線を描く。	
20	F区Ⅰ層	青磁 碗	18.4	1.3			胴上部よりなめらかに外反し端部は丸くする。内外面に毛彫りの文様あり。	
21	B区P-1 埋土中より	青磁 碗		3.7			碗胴下半で約1cmの間隔で細蓮弁文が描かれている。	16世紀

挿図番号	出土地点 (層位)	器種	法 量 (cm)				形 態・文 様	手 法・その他
			口径	残存 器高	胴径	底径		
22	F区Ⅲ層	青磁 碗		1.35		5.0	低い輪高台を持ち、疊付け部と高台裏のみ施釉せず。内面見込に界線が一条描かれている。	
23	B-h-7 P-6 埋土中位	青花		2.4		5.0	先端が細くなる輪高台が付く。胴下部から外面は膨らみをもって疊付けに至るが高台内側はヘラで削ったように直線的である。釉は疊付け部以外全部にかかっている。外面胴下部に草花文、高台外面に点々の界線を二条描く。内面見込にも文様あり。	P-6の埋土上面に大きな石を置き、その下にあった。明代。15世紀から16世紀初頭。
24	B区Ⅰ層	青花 碗		4.9			胴部のみ残存だが底部から口縁部外側へとやわらかく屈曲している。外面は二本の界線の間に文様が、内面は口縁下に大小の界線が二重に描かれている。	16世紀
25	B-g-2 SD-2 床面直上	青花 皿		1.0		6.0	胴下半からゆるやかに輪高台につながり高台内面は直線的に削ってある。疊付け部のみ露胎。外面高台際に二本の界線。内面見込には文様、ニカ所文様が剥げて露胎した部分がある。	16世紀
26	B区 中央Ⅰ層	青花 碗					碗の口縁部。外面には口縁下に大小の界線が二条、その下には文様あり。内面は口縁部に6mmから7mmの太い線状に具須を塗っている。	16世紀
27	B区 中央Ⅰ層	青花					外面に文様。	16世紀
28	D区Ⅰ層	青花 盤					波状口縁。頸部で内側に屈曲する。内外面とも文様あり。	16世紀
29	B-f-5 P-3	土鍋					胴下半にタタキが残る。	内面は丁寧にナデているが外面はタタキが残り、ススが付着している。16世紀前後。
30	B-i-2 SD-2 西の南側 P-8 埋土上位	土釜	18.6	3.4			固く焼き締められている。外面のみ灰褐色。内面は赤茶色である。	口縁部内面を斜めに削ってある。内面はヘラで粗く削り外面は横刷毛目で丁寧に仕上げている。15世紀中頃か。

挿図番号	出土地点 (層位)	器種	法 量 (cm)				形 態・文 様	手 法・その他
			口径	残存 器高	胴径	底径		
31	F区Ⅲ層	土釜	27.4	5.5			焼きはあまく、外面下にタタキが付く。	口縁部と同じで内面はかなり荒いヘラ削りの後、横刷毛を施す。外面口縁部は横刷毛、鏝下も横刷毛で、その下にタタキが斜め及び横方向に付く。15世紀中頃のもののか。
32	F区Ⅲ層	土釜	32.0	5.4			口縁端部が上に丸まっており、なだらかに鏝の先端まで下がる。その上に、横に凹線が三重に付けられている。	内面は縦横のタタキで整形しており、外面は鏝がやや下向きに付いている。内外面とも、スス付着。15世紀後半のものか。
33	F区Ⅲ層	土釜	20.4	4.9			口縁部内側に斜めのヘラ削りを施し、外面は口縁部分と鏝を同じように丸くつくり、鏝下はわずかにタタキが見える。	内面は荒いヘラ削りで外面口縁下は横刷毛目、鏝下も刷毛目とタタキを施す。15世紀中頃のもののか。
34	F区Ⅲ層	土釜	24.7	2.5			口縁部と端部の天頂部が面を持つ。鏝が破損している。	内面は荒いヘラ削りで外面は刷毛目で仕上げている。
35	F区Ⅲ層	土釜	20.0	4.1			口縁部内面が斜めに削られている。	軟質で磨耗が激しい。
36	F区Ⅲ層	瓦質 釜						鏝部の小片で磨耗が激しく不明である。
37	B区SD-1 埋土下位	備前焼播鉢		5.2			外側が明茶色に発色しており、かなり荒っぽい作りである。8本単位の条線がある。条線は左から右へと細くなっている。	内面は粗く整形した後、横刷毛を施して、条線をつけている。外面は刷毛によるナデで仕上げている。
38	D区SD-4 床面直上	備前焼播鉢		3.2			外面は暗茶色で内面は赤茶色の胴部の一部。	内外面は荒いナデ。
39	A区Ⅰ層	備前焼播鉢					内外面は共に暗茶色。内面に細目の均等な条線が付いている。	外面回転横刷毛。内面はヘラ削りで荒く整形してある。
40	F区Ⅲ層	備前焼 器種不明					外面は黒灰色。内面は暗茶色。	内面に刷毛調整。

挿図番号	出土地点 (層位)	器種	法 量 (cm)				形 態・文 様	手 法・その他
			口径	残存 器高	胴径	底径		
41	F区Ⅲ層	備前焼 甕					甕の頸部。焼き縮めてあるが内外面とも灰色である。頸部から口縁に至るわずかな残部がある。他の備前焼より古い。	内外面とも刷毛目。
42	B区SD-1 埋土下位	土師質土器 坏	9.8	1.8			胴上部より口縁へまっすぐ伸びる。端部は小さく丸く仕上げる。磨耗が激しく調整痕が不明。	
43	B区 中央I層	伊万里 紅猪口	4.2	1.5 (完形)		1.0	小さな輪高台から丸みを帯びて口縁に至る。口縁内面は4mm程、多小斜めに削っており、そこから見込までなだらかに下る。外面全体に貝殻のような条線がある。白釉が外面口縁部一部と内面全体に付く。	底部は削りだした輪高台か。
44	B区 中央I層	伊万里 紅猪口	5.0	1.6 (完形)		1.7	小さく低い輪高台からなだらかに丸みを帯びて口縁に至る。外面全体に貝殻状の条線があり、内面は口縁部に3mmの斜めに削った部分があり、そこから丸みをおびて見込に至る。白釉は内面全体と外面上部・高台裏にも少し付く。	底部は削りだした輪高台か。
45	F区Ⅲ層	伊万里 紅猪口	4.5	1.4 (完形)		1.1	小さく低い輪高台を持ち、なだらかに丸みを帯びて口縁に至る。口縁内側は3mm程、多少斜めに削ってある。白釉は内面全部と口縁部周辺にのみかかる。外面には貝殻状の条線が付く。	
46	F区Ⅲ層	伊万里 紅猪口		(0.8)		1.3	低く小さい輪高台。わずかに外面に貝殻状の条線が付く。釉は内面のみ。	削りだした高台か。
47	B区 中央I層	伊万里 紅猪口	4.4	(1.3)			内面に花卉の彫りがある。そのため口縁端部は不揃いになっている。内外面に薄青い釉が塗ってある。	
48	A区I層	唐津 碗		2.1		4.4	削り出しの輪高台を持つ碗。内面見込に目跡が三つ。黄茶灰色の薄い釉が内面にかかる。	畳付け部に回転ヘラ切りの跡が残る。
49	B区I層	京焼風陶器 碗		4.6		4.9	緑黄色の釉が畳付け部以外にかかり、高台内部に焼き縮めのしほり目がある。	胎土は精選され焼きは良好である。

挿図番号	出土地点 (層位)	器種	法 量 (cm)				形 態・文 様	手 法・その他
			口径	残存 器高	胴径	底径		
50	C区I層	伊万里		1.8		4.7	外面畳付け以外は青磁釉。内面は一部しか残っていないが呉須で、界線らしきものが描かれているようである。	胎土、焼き良好。 内外面、掛け分け。18世紀以降に広まったものである。
51	F区III層	近世陶磁器 皿	4.5	(1.8)		4.4	逆台形上の輪高台を持ち畳付け以外内外面とも灰色の釉がつく。内面見込に蛇の目状釉剥ぎ。その周囲一部に界線らしき文様を描く。	高台は荒く削りだしたのか、均質な厚さではない。畳付け部に砂が容着している。
52	I層	京焼風 陶器碗		3.0		4.0	高い高台を持ち、畳付けは丸く加工し、ここ以外には全部黄色の釉がかかる。貫入が多い。	軟質で軽い。
53	I層	近世陶磁器 皿		1.3		3.8	輪高台からわずかに上に丸く伸びていく。灰白色の釉が内側全部と外面高台近くまでかかる。	
54	C区I層	近世陶磁器 碗		1.8		6.3	少し外方向に開く逆台形の輪高台を持ち、外面高台部はえぐったように削られている。そしてやや外斜め上方向に伸びる。内面は見込に円形釉剥ぎ。露胎部は赤茶色に発色しており、内外面に灰緑色の釉が付く。	
55	B区I層	伊万里		(1.5)		3.6	畳付け部に露胎を残す輪高台を持つ。高台は外に開く逆台形である。内面は呉須で見込に二重の界線があり、中央に文様がある。	内外面掛け分け。18世紀以降に広まったものである。
56	I層	近世陶磁器 碗	10.4	3.5			内外面とも口縁に至って厚みがなくなり端部は小さくまとめられている。両面に白釉。外面には草花文が描かれている。	胎土精良、焼き良好。
57	F区III層	伊万里 碗	11.3	4.8			厚みがあり、胴下半から口縁までかすかに内側に丸みを帯びている。外面口縁下に二重の太い界線。その中に四方禪文。胴中央にも文様あり。	胎土精良、焼き良好。 外面中央にろくろ目の段かすかにあり。
58	A区I層	伊万里 碗	11.8	4.7			胴下半よりなめらかに丸みを帯びて口縁に至る。口縁端部は小さく丸く加工。釉は薄い灰色が内外面にかかり外面に草花文を描く。	胎土精良、焼き良好。

挿図番号	出土地点 (層位)	器種	法 量 (cm)				形 態・文 様	手 法・その他
			口径	残存 器高	胴径	底径		
59	B区I層	伊万里 碗	9.9	3.9	8.6	3.5	厚い胴下半から丸みを帯びて口縁に至る。口縁は細く丸く仕上げる。外面に白黄色の釉が畳付けを除いてかかる。内面は青灰色で見込に二重の界線。胴部に草文を描く。	外面ろくろ跡が残る。
60	D区I層	近世陶磁器		1.3		3.6	薄く低い輪高台を持つ。内外面に白黄色の釉が雑にかけてある。内面見込は円形に釉を剥いており、大量生産品である。一カ所碗上に見込より立ち上がる部分があるが、器種は不明である。	削りだし高台。
61	B区I層	円筒形花器		(5.3)			外面はヘラで撫でて調整しており灰緑色の釉(自然釉か)がたれている。内面は露胎である。	内面は指頭押圧や、刷毛にて仕上げている。
62	B区 中央I層中	伊万里		1.4		3.3	多小外方向に開く輪高台を持ち、外面には畳付け以外に青磁釉を付ける。白い縞がすじ状に付いている。内面見込に呉須で二重の界線を描く。	内外面は掛け分け。18世紀以降に広まったものである。
63	I層	近世陶磁器 碗		(2.8)		7.2	輪高台の端部を両側からヘラで削る。高台よりわずかに上方に伸びる。内面見込蛇の目釉剥ぎ。	高台の内外面をハケ調整。
64	D区Ⅲ層	近世陶磁器 碗	7.9	4.5			胴部下半に最大径の丸みを持たせ、頸部よりわずかに外上方へ開く。端部は丸く加工。口縁部には内外面とも暗緑色の釉、その下は乳白色の釉が使われている。	
65	D区Ⅲ層	近世陶磁器		(2.0)		6.9	ほぼ平らな底部から斜め外方向に伸びる。外面底部際まで黒茶色の釉が付く。	回転糸切りで底部をほぼ平らにしている。内面は回転ヘラ削り、ヘラ調整。
66	D区I層	近世陶磁器	18.2	(3.0)			口縁部は外に向かい四角い玉縁状になっている。黒灰色の釉が内外面に付くが玉縁上面のところは剥げて露胎している。	
67	D区I層	唐津 碗		(2.7)			破損しているが輪高台が付き丸みを帯びて上方へと伸びる。内外面全部に淡褐色の釉、白い刷毛目文様がはいる。	焼成軟質。

挿図番号	出土地点 (層位)	器種	法 量 (cm)				形 態・文 様	手 法・その他
			口径	残存 器高	胴径	底径		
68	A区I層	近世陶磁器 碗	11.9	(2.8)			胴上部から口縁にかけて丸みを帯びて伸び端部は細く丸くおさめる。内外面に白色釉。外面に呉須で文様あり。	
69	I層	近世陶磁器 碗	9.1	(3.7)			胴部がやや膨らみ口縁で少し外上方に伸び、端部は丸く仕上げる。呉須にて外面に書割と、その中に花文様。内面口縁は1.1cmにわたり呉須で塗られる。	
70	B区I層	唐津 皿	11.5	(2.3)			胴上部でわずかに内側に屈曲し口縁に至る。端部は細く丸く仕上げられている。青緑色の釉が内面と外面口縁部下までかかる。	ロクロ跡、顕著。
71	B区I層	唐津 碗		(3.9)			胴下部でわずかに屈曲し斜め上方に伸びる。内外面に淡黄色の釉が付く。貫入が多い。	
72	B区I層	伊万里 皿	14.0	(1.5)			口縁端部を内側に丸くおさめ、端部から内面へ斜めにつくる。外面は白色釉に黄色の貫入が縦に並ぶ。内面は呉須にて文様を描く。	
73	F区III層	近世陶磁器 蓋	13.0	(2.5)			丸みを帯びた胴から端部まできて、内側に約5mmの平らな面があり、その内側に細く高く返りを作り、その下はヘラで押さえて内面天頂部へ向け、丸みを帯びて伸びる。白青色の釉が返りから、外側の端部までを除き内外面に施されている。	
74	F区I層	近世陶磁器	10.4	(1.9)			胴上部から斜めに自然に立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。内外面に白青色の釉。口縁内面の四重の界線内を呉須で塗り、その中に文様がある。	
75	F区III層	砥石			全 長 7.5cm 全 幅 5.5cm 全 厚 5.0cm 重 量 320g		暗茶褐色の砂岩。一面は割れたままだが両側の二面は使用されている。	
76	I層	珪質頁岩 砥石として 使用か			全 長 5.8cm 全 幅 2.0cm 全 厚 1.2cm 重 量 16.3g		裏面は割れたままだが表面は平らに磨いており何かを擦った溝が一条残る。磨きの跡から中近世のものかと思われる。	





# 図 版



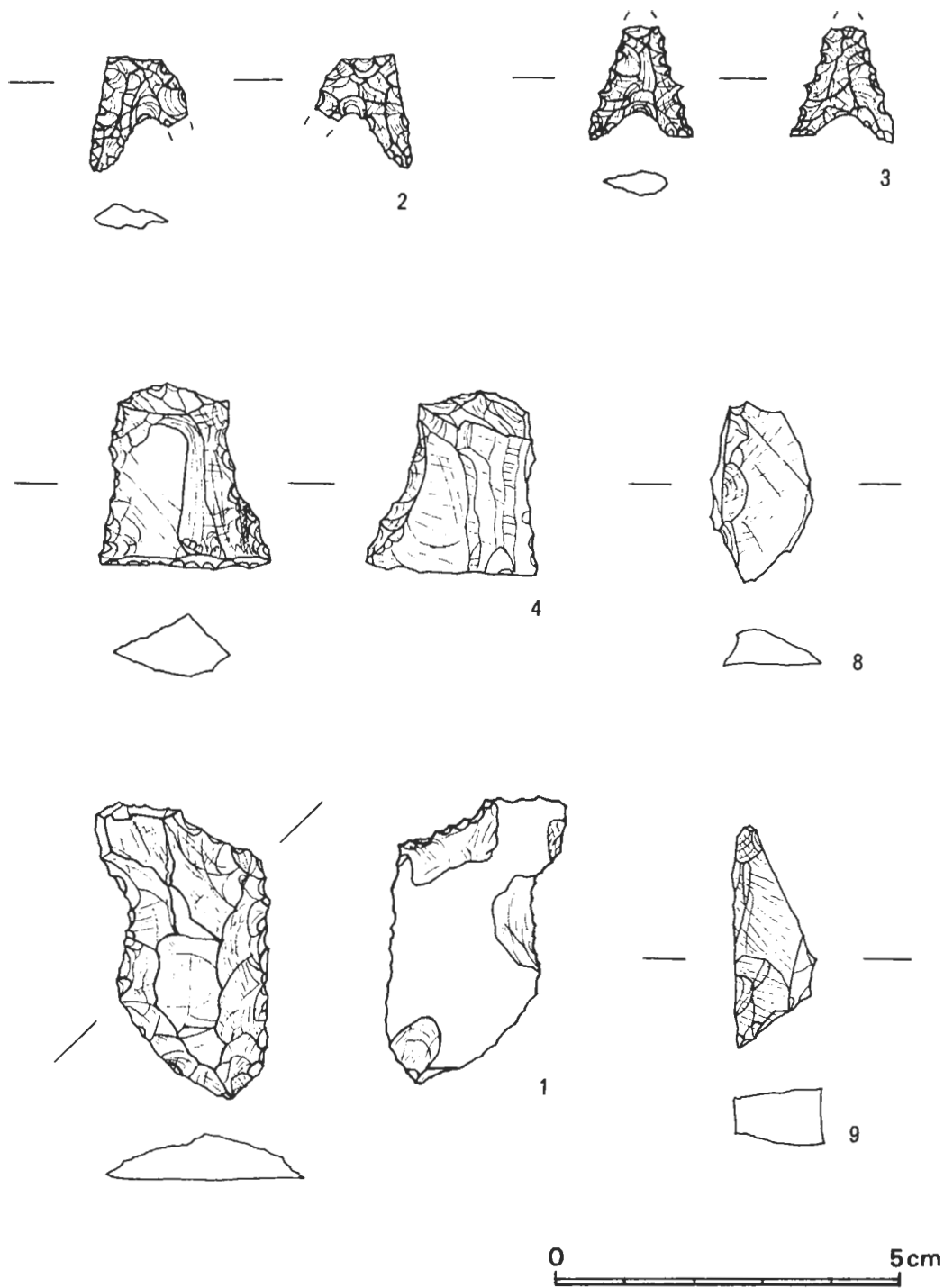


图12 石器·剥片 1

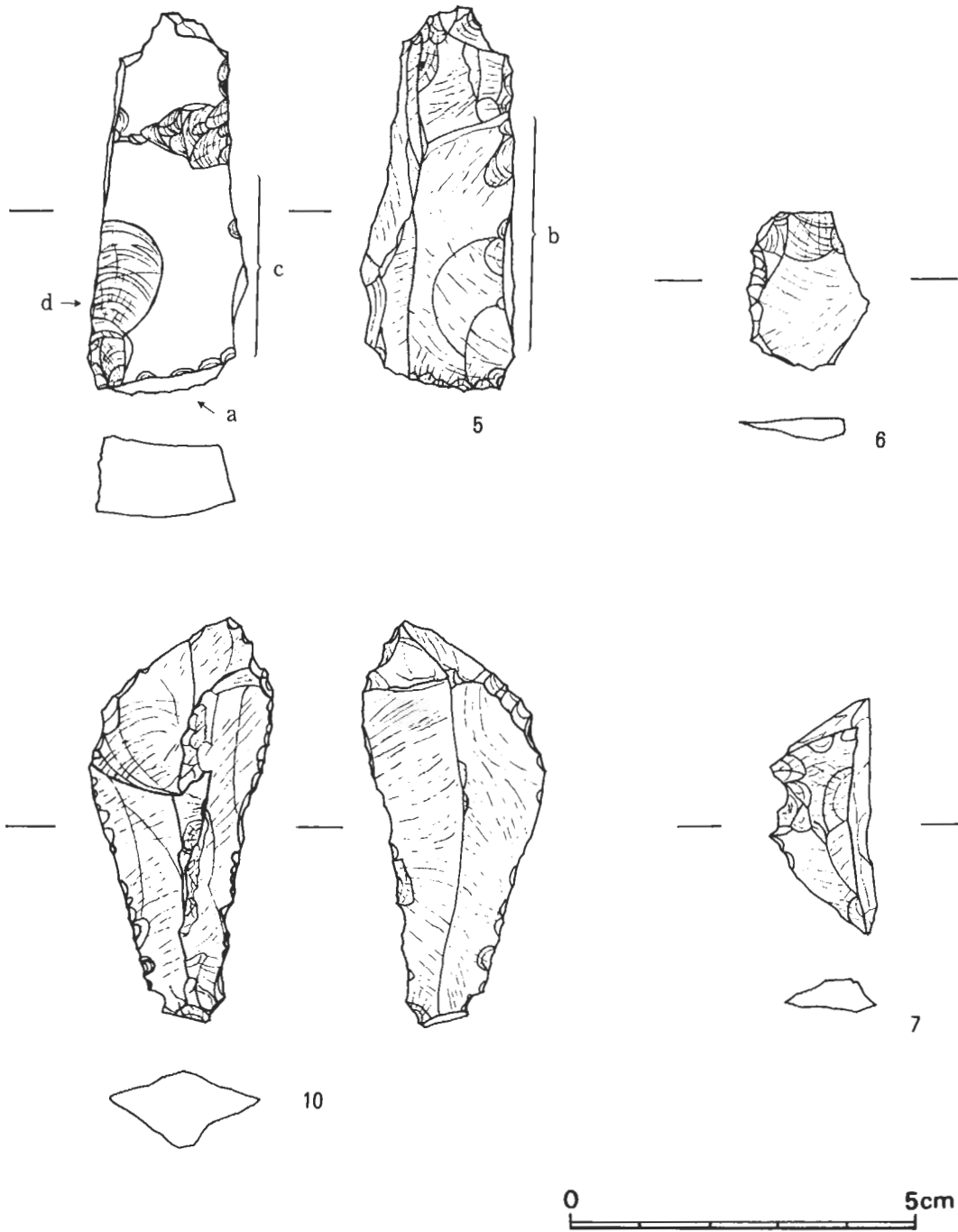


图13 石器·剥片 2

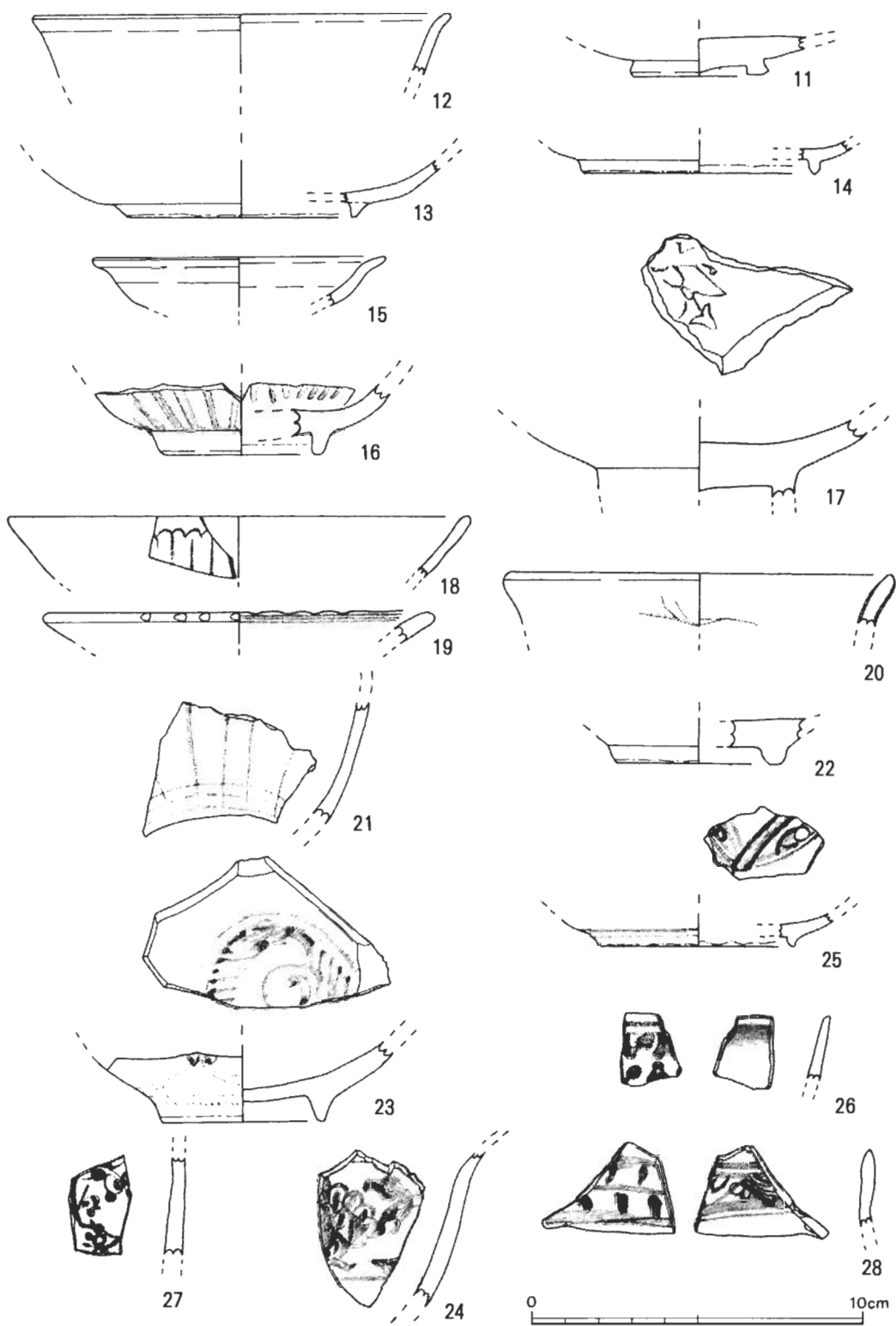


图14 白磁·青磁·青花

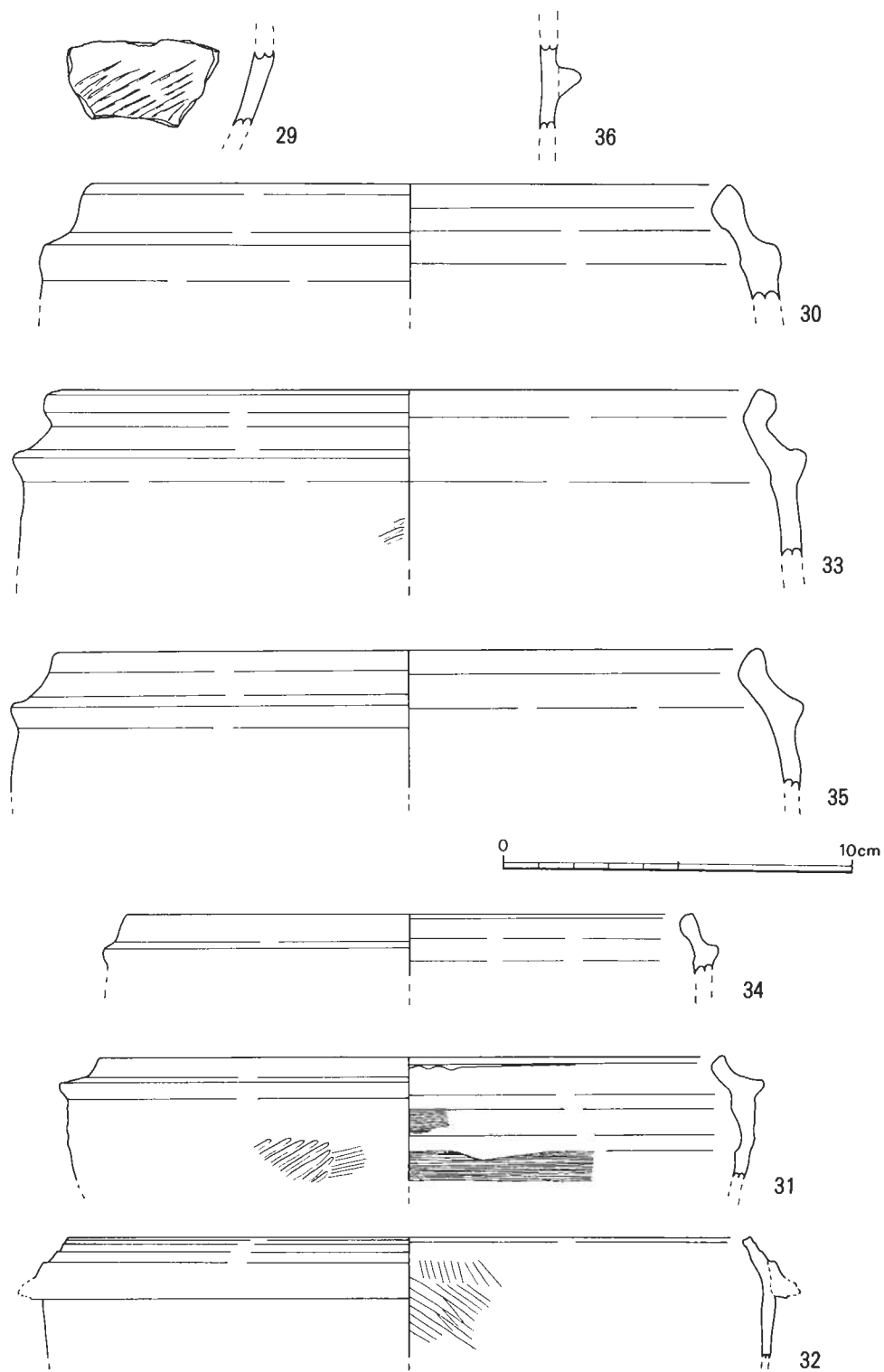
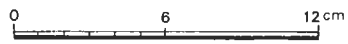


图15 土鍋・土釜



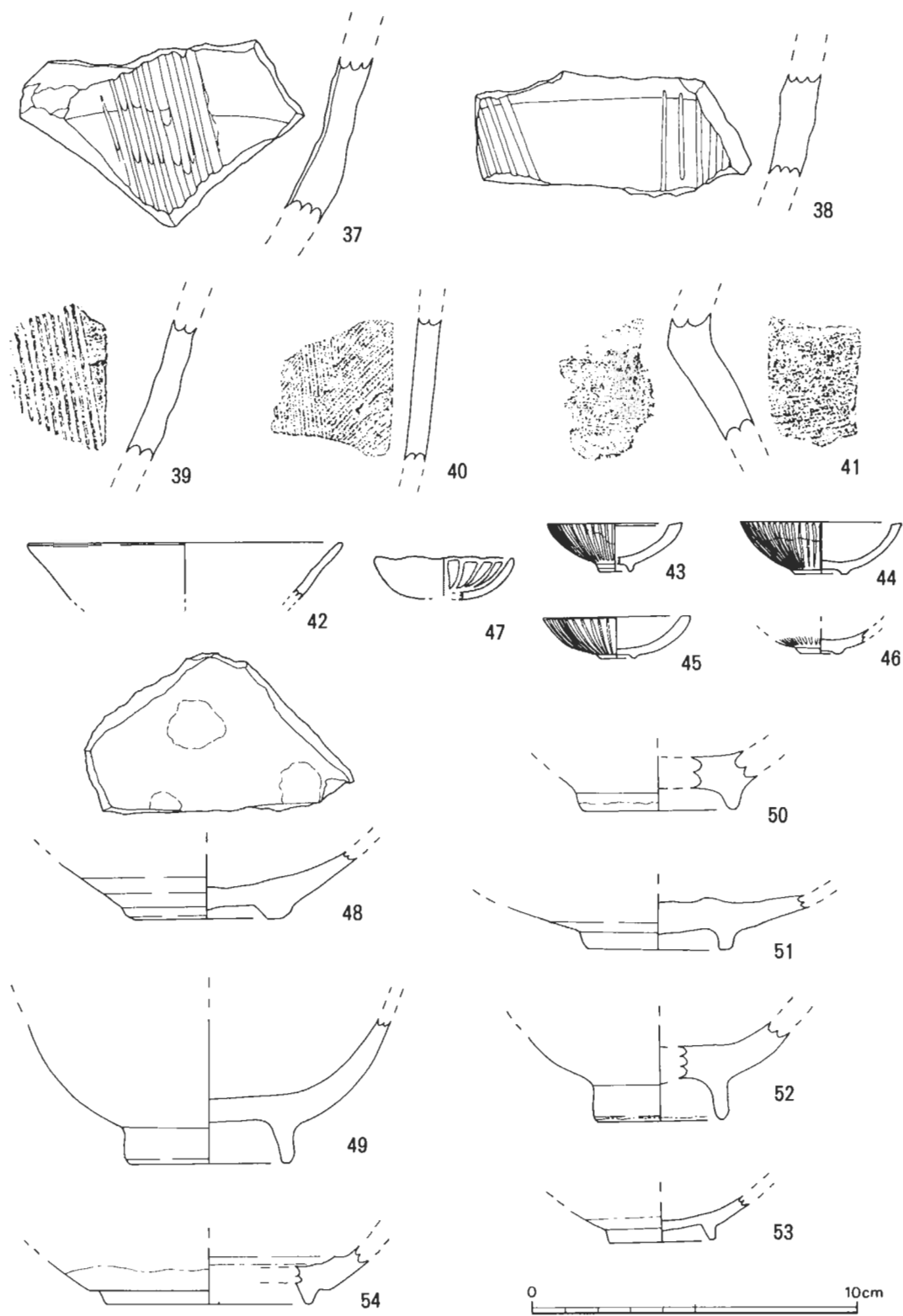


图16 備前焼・土師質土器・伊万里・唐津・近世陶磁器

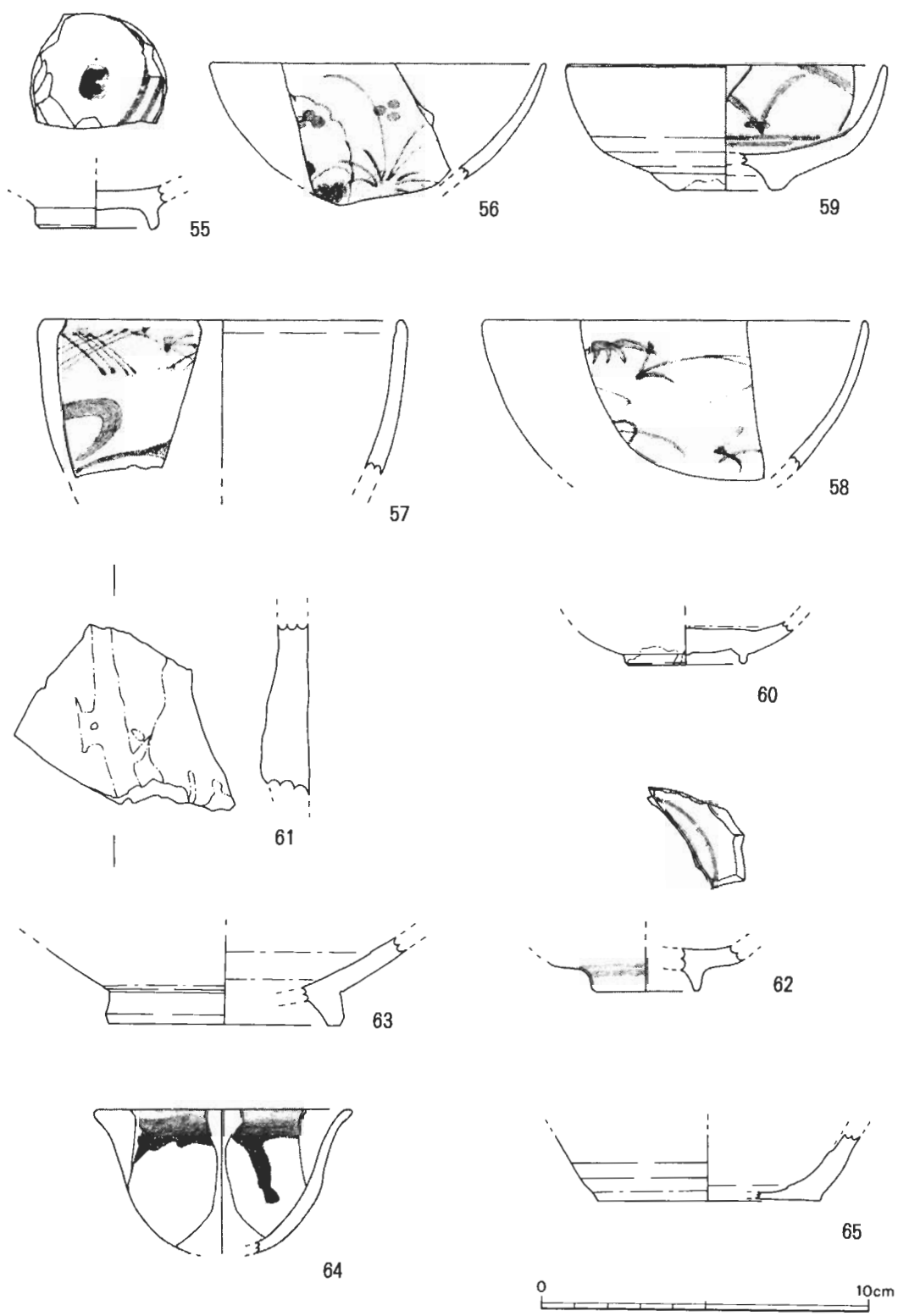


图17 伊万里·唐津·近世陶磁器



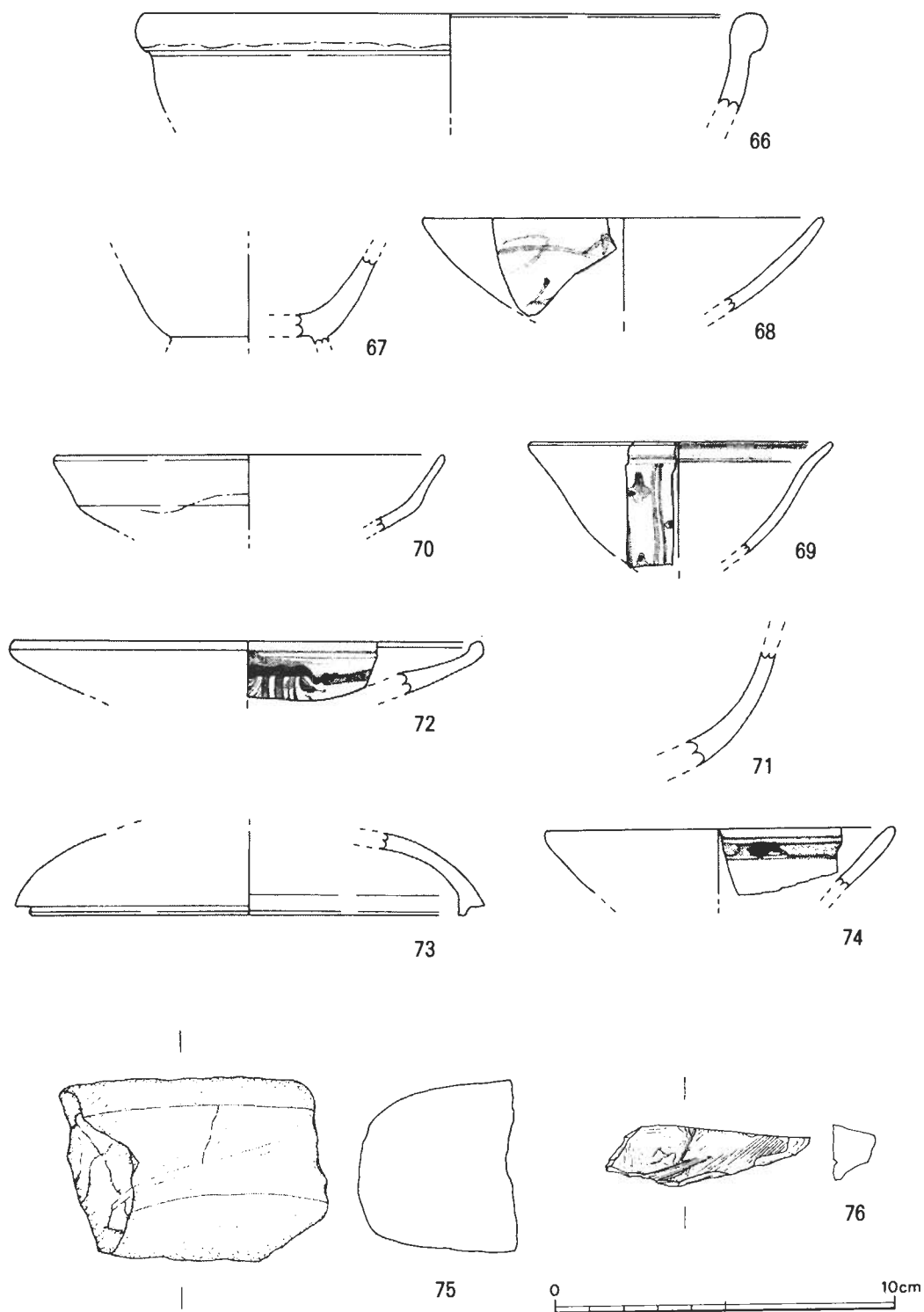


图18 伊万里·唐津·近世陶磁器·砥石



# 写真図版





南東より調査区を望む



近くの山地酪農



南西より調査区を望む



作業風景



作業風景



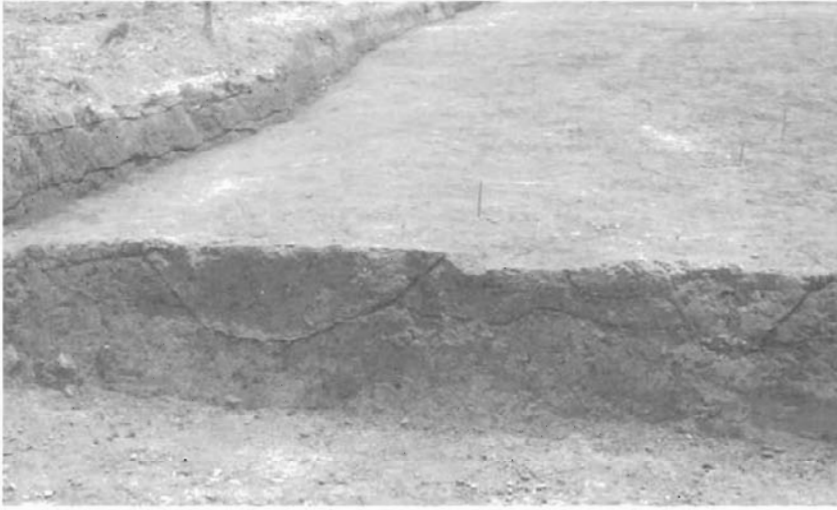
A区北セクション SK-1の検出



B区南セクション



B区北セクション



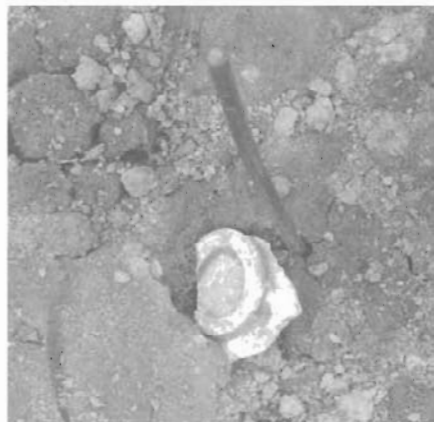
B区 SD-1 SD-2 検出状況とB-C区セクション



A区 遺構検出状況(左上SD-1)



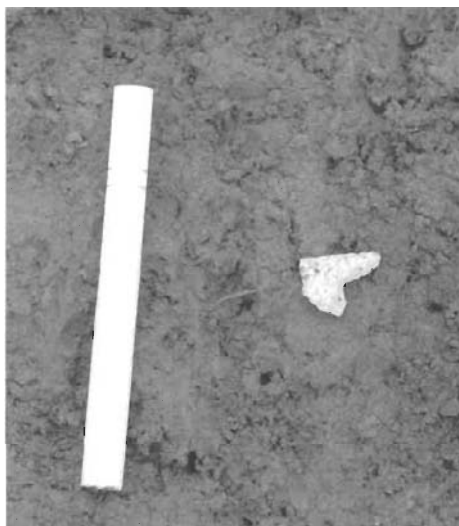
B区 P7 青花出土状況



B区 SD-2 白磁出土状況



B区 石匙出土状況



B区 石鎌出土状況



B区 SD-2(左) SD-1 検出状況



B区 SD-2 検出状況





B区完掘状況 北より



B区完掘状況 北西より



B区完掘状況 北東より



E区完掘状況 B区より西を



E区 SD-3 完掘状況(手前サブトレ)



F区完掘状況 東より



F区完掘状況 北東より



1



2



3



4



5



6



7



8



9



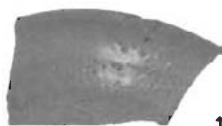
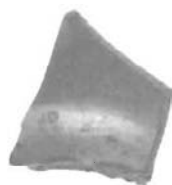
10



11



12



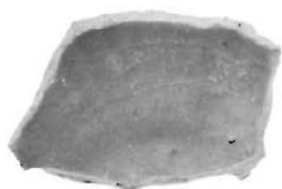
15



13



14



16



18



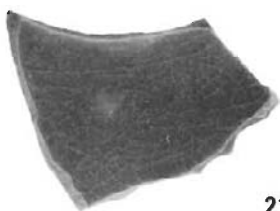
17



19



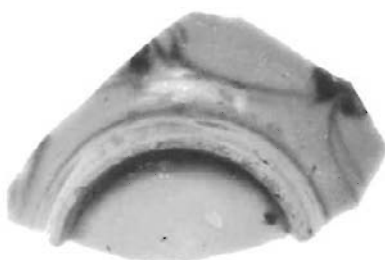
20



21



22



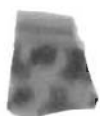
23



24



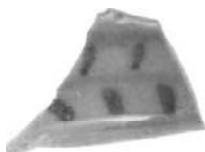
25



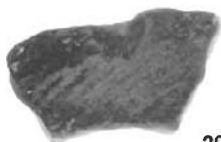
26



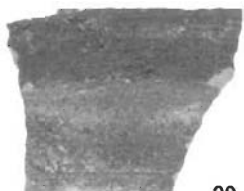
27



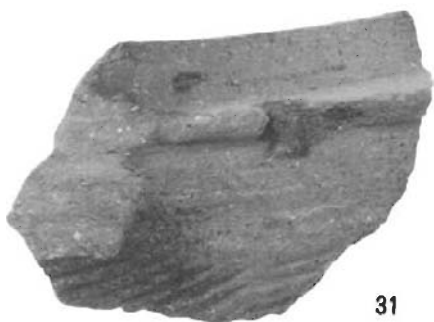
28



29



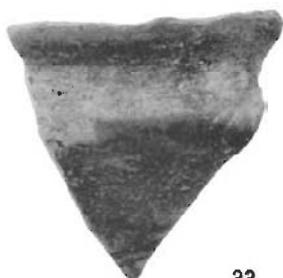
30



31



32



33



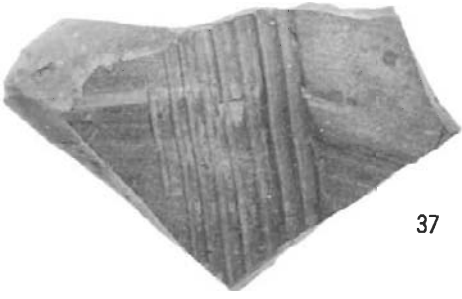
34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



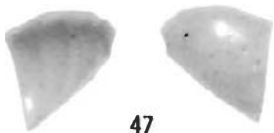
44



45



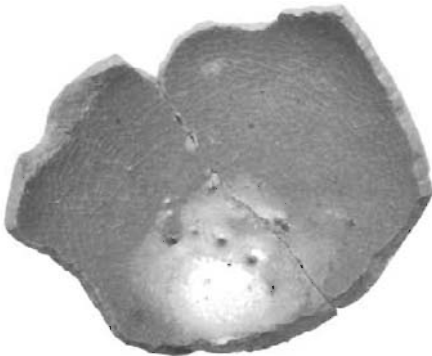
46



47



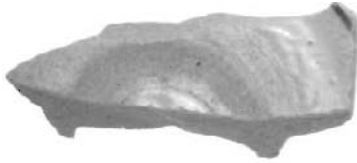
48



49



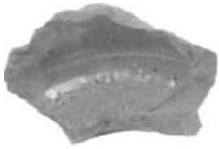
50



51



52



54



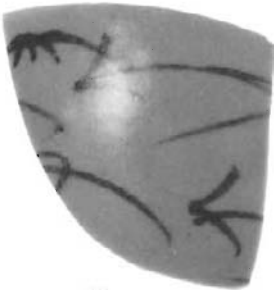
55



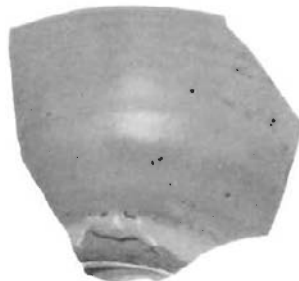
57



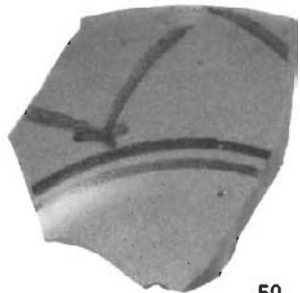
58



56



59







60



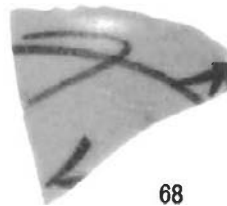
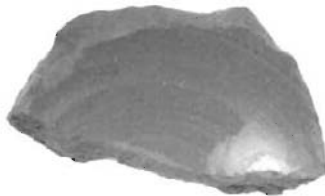
64



66



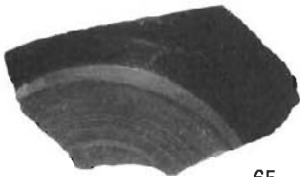
61



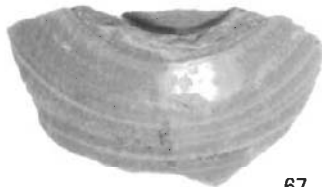
68



69



65



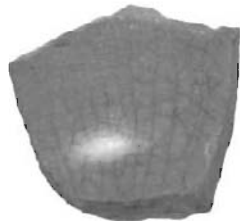
67



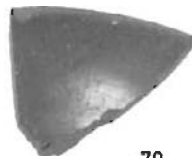
72



75



71



70



74



76



かんかん照りの日差しに、うだった時もありました。  
連日の雨、雨、雨に泣いた時もありました。  
皆様には本当にいろいろ御協力や教えを頂き、  
感謝しております。



発掘に御協力を頂いた皆様

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第15集

## 峰の上遺跡

窪川町南部地区県営圃場整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993・3

編集発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター  
高知県南国市篠原南泉1437-1  
TEL 0888-64-0671

印刷 弘文印刷(株)